

清末小説から 130

2018.7.1

- いくたびかの阿英目録20………樽本照雄 1
2014年の林紓評価………沢本香子 7
田漢漢訳『ハムレット』の底本2………荒井由美15
『比律賓志士独立伝』の底本3完………沢本郁馬31
自爆する日中の研究者たち1——清末小説と林訳をめぐる………樽本照雄37
清末小説から6、36、47

★予告です。『清末民初小説目録 第10版』の公表準備をすすめています。本年中にはお目に~~〇~~

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録20

樽 本 照 雄

『老残遊記資料』について

劉厚沢(上海在住)が中心となって『老残遊記資料』を編集していた。兄劉蕙孫(福州在住)と連絡をとりあっている。また、中国作家協会上海分会から連絡係のかたちで魏紹昌がいた。実質的な共同編集者であるかどうかはわからない。劉厚沢は魏紹昌のことをただの連絡係とし

てしか見ていなかったようだ(後述)。

『老残遊記資料』(1962)は、「老残遊記」について知るためには不可欠の書籍である。ところが、私が卒業論文作成時(1970)に参照しようにも入手できなかった。まわりに所有する人もいない。先行論文には重要書籍として紹介されている。それを見るができない。1966年から中国で発動された「文化大革命」が、出版界をも機能停止に陥れたのが原因のひとつだ。赤いビニール装丁の小型本『毛主席語録』と数種類の「毛沢東選集」および魯迅作品しか印刷発行されていない印象が強い。種類は少ないそれだけが大量にしまわった。大学の近くに中国書籍専門店「大安」が店をかまえている。中国大陸からの入荷はほとんどなくなった。通学の途中だから毎日のように訪れたが書棚に変化がみられない。荷物が届いたのを見れば香港からだ。古書の影印本がこれまた大量に作られ高値で売られた。どんな状況でも商売人は努力をするのだな。大陸での出版が停止した

のを好機到来だと捉えたのだ。「文化大革命」が日本の商社にあたえた大きな影響も人づてに聞くだけのこと。日本にある友好団体がふたつに分裂し対立した。それが大学の中国語学科内に持ち込まれた。中国書籍専門店でも同様だ。私はただの学生顧客でしかない。影印でもいいから『老残遊記資料』を読みたいと願った。願いがかなう。京都「大安」から独立した(させられた)森脇英夫が名古屋で采華書林を営んでいる。そこが複製本を作った。どこにも影印という表示はない。またのちに香港の書店目録に該書が掲載されているから注文したこともある。原本ではないかと思ったのだ。すると采華書林の複製本を送ってきた。原本は日本の古書店から購入した。

『老残遊記資料』の特色のひとつは、劉大紳「關於老残遊記」が収録されていることだ。それに劉厚沢がつけた詳細な注釈が役に立つ。親族しか知り得ない貴重な記述をふくんでいる。

劉厚沢は、「老残遊記」発表について次のように解説している。少し長いが翻訳して引用する。

『繡像小説』半月刊の第9期から第18期まで「老残遊記」第1回から第13回までを掲載した。毎回挿絵が2幅あり、その時間は光緒二十九年癸卯八月初一から十二月十五まで、新暦では1903年9月から1904年1月である。『繡像小説』が原稿第11回全文を没書にしたためそれ以後の各回は前に移動し、この中断した第13回は実は原稿第14回である。翌年、光緒三十年甲辰(1904年)に「老残遊記」は『天津日日新聞』へ移り、おそらく「後半」だけではなく阿英同志の考証によればあらたに第1回より始めた。私もその考えに賛成する。93頁

この説明を読めば明白である。劉厚沢も『繡像小説』の定期発行説を信じている。それとの

関係で「老残遊記」の『天津日日新聞』は、光緒三十年甲辰(1904)だと疑わない。

魏紹昌も『天津日日新聞』連載が1904年であると堅く信じ込んでいた。あとでも触れるが、魏紹昌「李伯元と劉鉄雲の一段文字案」(『光明日報』1961.3.25)において「第二年(一九〇四)、『老残遊記』便移刊到『天津日日新聞』報上去了」と明記している。魏紹昌は阿英の指摘する1904年説をそのまま支持していることがわかる。

前述のとおり『老残遊記資料』には、劉大紳が残した「老残遊記」についての長篇論文を収録することになっていた。本文そのものに大量の注がほどこされている。それに加えて、必要な箇所にも劉厚沢が注釈をつける。その相談相手は劉蕙孫である。手紙によって意見を交換し、資料をやりとりした。

劉鉄雲日記の部分的公開

劉蕙孫は、劉鉄雲「乙巳日記」に「老残遊記」執筆についての記述があることに気づく。書き写して上海の劉厚沢に送った。劉兄弟は、「老残遊記」執筆時間について討論を重ねる。だが結論がでない。その部分を抜き出して公表した。

乙巳(1905年)

十月初三日、帰寓撰《老残遊記》卷十一告成。

十月初四日、晴、撰《老残遊記》卷十五。

十月初五日、晴、決計回京……撰《老残遊記》卷十六。^{*65}

卷十一ほかは、第11回、第15回、第16回と同じ意味だ。1905年の日記であることを確認する。

「老残遊記」初集20回は1904年の『天津日日新聞』に掲載されて完結した。阿英はそう書いている。ならば1905年のここに見える「老残遊記」は二集に違いない。事実、劉厚沢がほ

どこした注釈には、「考《老残遊記二編》的写作」と記している。二編は二集と同じこと。

劉兄弟は1905年日記の「老残遊記」が二集についての執筆記録だと考えた。阿英の指摘1904説があるからそう考えざるを得ない。時間の順序からいえば自然にそうなる。それ以外になにがあるというのだろうか。

すると理解不能の状態に陥ってしまう。記述が整合性に欠けるからである。

劉兄弟は何度も手紙をやりとりし、討論をくり返した。劉厚沢が考えている「老残遊記」の執筆過程にこの劉鉄雲日記の記録が時間的にうまくはまらないのだ。祖父劉鉄雲が書き誤るはずはない。本当に1905年の日記なのかとも疑う。強い疑問を劉厚沢はいただいた。

初三日に二集第11回の原稿を書いた。ここは、よろしい。

次が問題だ。

翌日に二集第15回原稿を書いた。本当だろうか。疑問符が当然のようにわき上がる。

ふたつある。

1 第11回から翌日は一気にとんで第15回原稿とはどういうことか。二集原稿の第12回から第14回はいつ書いたのか。

2 二集の新聞連載は1907年だ。1905年に書いた原稿がなぜ2年も後になって発表されるのか。2年間も寝かせておく理由がわからない。

魏紹昌から提出してきたふたつの疑問だ。劉厚沢は、問題を解決することができない。だからこそ、なにかの間違ひではないかと疑うのだ。ついに解答を見つけることはできなかった。

今から考えるに、答えは得られなかったにしろ、劉兄弟のこの問題に対する処理方法は結果としては正しい。

まず新しい資料の提示を行なった。新しい材料、新しい見方は研究を進展させるためには欠かせない。劉鉄雲日記から引用したのは劉厚沢しかいない。評価すべきである。彼らは祖父の資料を保存するばかりか研究に役立てるために

公開したとわかる。

もうひとつは、疑問は疑問としてそのまま残した。無理矢理に理屈をつけなかったところがよい。資料を書き換えなかったのはもっとすばらしい。資料を隠蔽する人にくらべて、と比較するのは失礼だが研究者としての資質は数等すぐれている。

魏紹昌を含めてその後も回答を提出した研究者はいなかった。1966年から「文化大革命」が始まる。研究どころのさわぎではない。

樽本が日本において解答を提出したのは1976年4月のことだった。中国で「文化大革命」が収束する直前である。

その前段階にひとつの発見がなされた。新聞切り抜き本『老残遊記二集』の存在を日本で確認したことだ。

『老残遊記二集』の発見

私が新聞切り抜き本『老残遊記二集』を見つけたのは偶然である。だが、いきあたりバッタリに遭遇したわけではない。昔のセイロンの王子3人ではあるまいに(セレンディピティ serendipity)。

「老残遊記」の各種版本を収集し本文を比較検討する作業を進めていた。その流れのなかに『老残遊記二集』発見がある。

新聞切り抜き本『老残遊記二集』(京都大学人文科学研究所所蔵)を見て判明したことは、以下のとおり。

1 『天津日日新聞』光緒三十三年七月初十日(1907.8.18)から十月六日(11.11)までに9回分が連載された。

2 新聞から直接切り抜いて自家製本している。

3 署名は鴻都百鍊生となっている。初集の洪都百鍊生とは1字違い。ただし通音する。

二集は9回である。この事実が諸説の誤りを正すことになった。

二集の回数については14回あったと劉大紳は

述べている。だが結論をいえば、実は初集14回のことなのだ。二集と取り違えている。誰にも間違いはある。劉鉄雲の息子大紳であろうとも例外ではない。その部分に注して劉厚沢は原稿16回があったと断言する。これは劉鉄雲日記に見える16回を指す。これも初集と二集と取り違えている。いずれも誤りであることは明らかだ。

大事なのは、新聞連載が1907年である点だ。実物によって確認できた。動かしようがない事実だ。原稿回数は別にしてここは劉大紳の証言が正しい。裏付けが得られたことになる。以後の探索はこの事実から出発した。

ひとことつけ加える。中国では『老残遊記二集』9回分の実物は失われたらしい。二集9回新聞切り抜き本を発見したのは、天津日日新聞社に勤務していた劉鉄雲の親戚だった。1920年代のことだ。数人で分担して手書きの複写本を作った。残ったのはその複写本だけ。切り抜き本はその後行方不明である。

1934年、手写本にもとづいて4回分が雑誌『人間世』に掲載された。翌年、6回分に増やして単行本(上海・良友図書印刷公司)が刊行されている。その時は7-9回は未収録のままになった。だから劉厚沢たちが編集する『老残遊記資料』は、二集第7-9回を収録してその最大の目玉にしたのだ。その時底本にしたのがあの手写本である。ゆえにこまかな書き写し間違いがいくつも発生している。これを指摘した文章を知らない。複写本が今も保存されているのかどうかも不明のままだ。

日本に所蔵されるのは中国で再発見されたのとは別物である。

確実な証拠は押さえている。つぎの探求作業はこの二集新聞連載が1907年であることを前提にして一步を進める。

劉厚沢が疑問を出していた。1905年に二集原稿を書いてなぜ2年間も放置しておいたか。

この疑問は重要だ。2年間ほっておく理由がもとからない。二集を書きながら新聞連載が並

行して進んでいる。そう考えるのが合理的だろう。そうなると劉厚沢の疑問の出し方が間違っている。そう感じる。

第11回の原稿を書いた翌日が第15回原稿執筆だ。第11回と第15回以降の原稿。どこかで見たことのある数字ではないか。

初集第11回原稿は『繡像小説』では没書にされた。第14回までの原稿はすでに李伯元たちの手元にある。第15回以降は劉鉄雲が新しく書いたものだ。

劉鉄雲日記に見える第11回原稿は二集ではなく初集のものではないか。その推測は瞬時にして確信にかわる。

『天津日日新聞』で連載するにあたり没書になった第11回を復元する必要がある。劉鉄雲が日記に記述しているのはそのことにほかならない。第12回から第14回までは『繡像小説』に掲載された。あらためて書く必要はない。翌日に第15回から新しい原稿執筆にかかる。

劉鉄雲日記をあらためてよく見る。「老残遊記」とだけある。どこにも「二集」という2文字はないのだ。劉厚沢らが二集だと勘違いしたにすぎない。

これが「老残遊記」原稿第11回執筆の謎に対する私の解答である^{*66}。

劉兄弟、魏紹昌らは、阿英のいう「1904年」新聞連載説に思考が最初から縛られていた。はじめに意識の刷り込みがおこなわれている。考察の出発点を誤った。1905年の日記に出現する「老残遊記」は二集だと思いこんでいる。そこから抜け出すことは不可能だった。それ以外になにも考えることができない。

その証拠を劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』(済南・齊魯書社1982.8)に見ることができる。

私は「老残遊記二集」を機械複写し劉蕙孫教授に贈呈した。劉蕙孫は二集の実物複写を見ている。1907年の『天津日日新聞』だと私は確認していると書いているのだ。

ところが彼の『鉄雲先生年譜長編』133頁で

は、二集の新聞連載を1905年の項目に挿入する。しかも掲載年月日をわざわざ「一九〇五年乙巳七月初一日」と書き換えた。「光緒三十三年七月初十日から十月六日」、つまり1907年の新聞連載だと私は明記している。目の前にある1907年という事実をなぜ1905年に誤るのか。わけがわからない。実物の複写を見ていながら阿英の犯した誤りから最後まで自由になることができなかつた。重症だといわざるをえない。

ここで終わると劉一族には失礼になるだろう。代表して劉徳隆(劉厚沢のご子息)の見解を紹介しておく。劉鉄雲日記に見える「老残遊記」原稿執筆は初集のものだと正しく把握している*67。

1905年、劉鉄雲は「老残遊記」第11回を下書き原稿にもとづいて復元した。間違いない。

ここに飛びついたのが汪家榕だ。 罇

【注】

65) 魏紹昌編『老残遊記資料』94頁

66) 関連して以下の文章を発表した。

樽本「天津日日新聞版『老残遊記二集』について」『野草』第18号1976.4.30、95-104頁。要旨：中国では失われてしまった『老残遊記二集』を京都大学人文科学研究所で発見した。天津日日新聞に掲載されたものを切り抜いた貴重本である。掲載の日付を確認し発表年を特定する。本版本の発見は、二集の発表年月が1907年であると特定できたばかりではなかつた。二集が1907年発表だとすると新しい問題が出現する。従来は、1905年劉鉄雲日記に見える原稿執筆は二集のものだと考えられてきた。しかし、1905年の原稿は、『繡像小説』連載中に没書となった初集第11回であったのだ。本稿の要旨が中国語訳された。草平輯「《老残遊記》(《天津日日新聞》版)初集、二集刊行考」(中国社会科学院文学研究所動態組編『文学研究動態』1982年第10期。のち、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』成都・四川人民出版社1985.7所収)。1984年、天津の大学図書館で該文を偶然見つけて読んだ。

[日]樽本「晚清小説資料在日本」熊向東、周榕

芳、王継権選編『首届中国近代文学国際学術研究会論文集』南昌・百花洲文芸出版社1994.7、239-250頁。(中国語)要旨：意外に思われるかもしれないが、日本にも清末小説の資料が存在する。中国から輸入された書物が保存されているばあいがあり、それが中国大陸では失われていたりするのだ。李伯元の『庚子藥宮花選』、『増注官場現形記』の世界繁華報館版、劉鉄雲『老残遊記二集』などなど、いずれも貴重である。

樽本「《老残遊記》写作刊行的兩個問題」陳薇監訳『清末小説研究集稿』中国済南・齊魯書社2006.8、28-34頁。(中国語)要旨：「老残遊記」の執筆過程について疑問が提出されている。1905年劉鉄雲日記に見える二集執筆である。第11回を書いた翌日に第15回を執筆しているが、第12-14回はいつ書いたのか。1905年に原稿を執筆し、その新聞掲載が1907年というのは時間的に見て遅すぎる。この謎を解くかぎは、『老残遊記二集』の発見にあった。日本で発見した該書は、その発表が1907年であることを確認することになった。「老残遊記」が最初『繡像小説』に連載されていた時、掲載中止の理由が編集者による原稿第11回の不採用である。没書になった第11回を復元したのが劉鉄雲日記に見える第11回にちがいない。これを二集だと断定したのは劉厚沢、劉蕙孫、魏紹昌らの勘違いであった。遠因を阿英に求めることができる。



『滙榕書札』

樽本「《老残遊記》執筆経過の謎1——書簡集

『滬榕書札』に見る』『清末小説から』第93号 2009.4.1、1-11頁。要旨：『滬榕書札』は劉厚沢から兄蕙孫にあてた書簡集である。劉鉄雲の孫にあたるふたりは『老残遊記資料』の編集と執筆に従事した。その過程で彼らは「老残遊記」執筆経過の謎に遭遇する。問題は執筆経過のみに止まらない。規模のより大きな謎に発展するのである。

樽本「『老残遊記』執筆経過の謎2完——書簡集『滬榕書札』に見る』『清末小説から』第94号2009.7.1、1-12頁。要旨：劉厚沢と蕙孫兄弟は、「老残遊記」初集が『天津日日新聞』に連載されたのは1904年であるという阿英の誤った断定を前提にして考えている。出発点が間違っているから「老残遊記」執筆過程がどうなっているのか正しく理解することは不可能であった。魏紹昌から提出された執筆過程についての質問に答えることができないのも当然だ。一方の魏紹昌自身も、阿英説を信じていたから解答に到達することができなかった。後年、樽本が正しい答えを提出した。魏紹昌は知らぬ顔をして、阿英説には根拠がない、と書いたのだ。より大きな問題とは、こうだ。「文明小史」が「老残遊記」から盗用していること。それに掲載誌である『繡像小説』の発行遅延問題がからむ。編集長だった李伯元が死去したあとも『繡像小説』は発行を継続していた。李伯元の死後に発表された「文明小史」は、李の作品ではない。彼の協力者であった欧陽鉅源が執筆したとしか考えられない。「文明小史」の著者問題に発展するのだ。

樽本「『繡像小説』問題2」『清末小説から』第99号2010.10.1、1-6頁。要旨：『繡像小説』問題とは、編者、発行遅延、さらに「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件である。主編者が李伯元であったときに、「老残遊記」の没書事件が発生した。ところが、その没書になったはずの内容が「文明小史」に盗用されている。では、盗用したのは李伯元だったのか。これに『繡像小説』の発行遅延という事実がからむので問題が複雑になる。事実上、李伯元の死去後に問題の「文明小史」第59回が発表されているのだ。死者が原稿を書くことはできない。李伯元にかわる人物がいた

はずだ。それは欧陽鉅源であるというのが従来からの私の主張である。盗用事件について、もういちどその経過を整理しなおした。

67) 劉徳隆「『老残遊記』版本概説」『清末小説』第15号 1992.12.1。のち劉徳隆『劉鶚散論』昆明・雲南人民出版社1998.3所収

★

劉 寧寧○『莎士比亞在上海（1949年前）——以〈申報〉為中心』上海・華東師範大學碩士學位論文2016. 5. 17

曾 攀○『跨文化視野下的晚清小説叙事——以上海及晚近中国現代性的展開為中心』北京・中国言実出版社2016. 6

呉 沢泉○『曖昧の現代性追求：晚清翻新小説研究』北京・中国社会科学出版社2016. 10

宋 韻声○『中英翻譯文化交流史』瀋陽・遼寧大學出版社有限責任公司2017. 5 中外翻譯文化交流史叢書

李彦東『清末小説の生産と伝播』

北京・中国文史出版社2008.12

石印小説小論

〈繡像小説〉中の“繡像”

新聞生産中の小説伝統——以早期〈申報〉文人対

〈聊齋志異〉的接受和轉化為例

申報館与〈儒林外史〉

“刊里書外”：重論〈海上花列伝〉的風格及語言

小報与“現形記”的興起：李伯元及其〈官場現形記〉

〈老残遊記〉的三個維度

〈孽海花〉：歷史小説的“範式轉移”

〈新小説〉：類型与意識形態的交錯

〈小説林〉：文化生産与小説批評

王風『世運推移与文章興替——中国近代文学論集』

北京大學出版社2015.1

“近代文学”“新文学”“現代文学”諸問題

林紆非桐城派說

周氏兄弟早期著訳与漢語現代書写語言

近代報刊評論与五四文学性論說文

林紆：拼我殘年極力衛道 「新時代的旧人物」

2014年の林紘評価

沢本香子

林紘の名前を冠した学会が開催されている。私が知っているだけで最近の3学会がある。2013年北京「林紘文化研究高峰论坛」、2014年福州「林紘研究国際学術討論会」、2016年北京「林紘与近現代中国文化転型学術研討会」だ。それ以外にも開催されたかもしれない。

林紘の名前を前面に押し出しているのが特徴だ。いうまでもなく林紘批判ではない。過去において推し進めていた激しい林紘批判の軌道を修正する意味を持たせていると考えられる。



呉仁華主編『革新与守固』(2017)^{*1}は、上記2014年福州で開催された学会の報告文集だ。

林紘と商務印書館は深い人間関係で結ばれていた。ほとんどの林紘書が上海の商務印書館から出版されている。該論文集も商務印書館が刊行を引き受けた理由かもしれない。

林紘は戯曲を小説化して翻訳した。すなわち戯曲と小説の区別がつかなかった(「区別がつかない論」)。これが林紘を批判するひとつの根拠である。

ほかの決まり文句をいくつかあげる。外国語ができなかった翻訳家、2流3流の価値のない外国小説を大量に翻訳した、誤訳削除が多い、短篇モデル小説を書いて文学革命派を攻撃した、北京大学校長の蔡元培に詰問する手紙を送った、蔡元培に反論されて一瞬で敗退した、軍閥の武力を背景に北京大学に圧力をかけた、などがすぐに思い浮かぶ。負の要素を拡大して強調した林紘批判である。それらのうち外国語を理解しなかったことのみが林紘本人も認めている事実だ。

本稿においては「区別がつかない論」を焦点とする。これは文学研究の範囲内の問題だ。議題にすれば、当然ながら林紘批判を推進した銭玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英に触れざるをえない。その後ろに蔡元培、魯迅、周作人らもいる。問題は相当に大きい。

「区別がつかない論」を正視すればそれ自体が成立しない不適切立論、すなわち誤りであることがわかる。その誤りを認めれば中国翻訳史上の林紘冤罪事件は解決し林紘再評価に結びつく。そう私は考えている。

上記の学会に参加したのは林紘研究の専門家たちである。専門家は「区別がつかない論」についてどう考えているのだろうか。はたしてこれについて意見を表明する研究者はいるのか。現在私が抱いている関心事のひとつだ。

国際を称する称さないにかかわらず、中国で大規模学会を開催する際には関係機関の承諾が

必要だ。参加者についても当然選択する。報告の結果を論文集にまとめる段階では掲載審査があるだろう。参加者全員の論文が収録されているわけではない。厳選されているはずだ。だからこそこの論文集には2014年当時における中国学界の林紓に対する認識と評価が表現されていると考えてよい。

該論文集には、「前言」を含めれば21本の文章を選んで収録する。論文名を見るだけで、教育、翻訳、研究、詩歌、戯劇、絵画、交遊、家書などなど、林紓の生涯を概観して多彩な側面を取り取りあげていることがわかる。

前述のとおり私の現在の興味が林紓の翻訳を中心とした評価問題にある。「区別がつかない論」に関して、2014年の時点でどの程度まで公表が許可されているのか。そこが知りたい。

本稿では私が判断してそれに関係の深い文章、箇所の方に言及する。ご注意いただきたい。それぞれの論文を紹介するのが本稿の目的ではない。言うまでもないが、各論文の価値を判定しているわけでもない。もともと各論と私の関心とが一致しているとは限らないのだ。論文を書いた研究者が主張したい箇所とは違う部分を取り出すこともあるだろう。ご了承を願う。

林紓について中国学界はどのように扱っていたのか。呉仁華「前言」が細心に工夫をこらし、実は的確に指摘している。

いわく「中国近現代文化、歴史の発展における林紓の地位を正確に位置づけるように我々は希望している[我們既希望將林紓在中國近現代文化、歷史發展中的地位準確定位]」(1頁)。ここは現状を変更してもらいたいという希望を述べている。つまり、これまでは林紓の歴史的地位を正確に位置づけてはいなかったという意味である。

あるいは「多数の清末民国思想史著作のなかで林紓は「欠席」している[在多數的晚清、民國思想史著作中，林紓是“缺席”的]」(同前)である。ここは過去の実状を解説している。清

末民国思想史において林紓を排除していたことを認めているわけだ。

私の考えを述べる。林紓がそのように待遇されてきた原因のひとつは、1910年代の五四前からはじまる文学革命派による林紓批判だった。さらに従来の中国学界がそれを認め主導してきた。以前からいつている。「勝者の文学史」において林紓は敗者の烙印を無理やり押された。批判の対象となった林紓に与えられる場所は基本的に存在しない。特別に呼び出す時は、負の評価を負わせるだけ。林紓批判が学界の基本方針だった。

以上のことは現在の中国では直截的に書くことができないらしい。書いていないだけで多くの研究者は従来の経緯と今の動きを了解しているのだろう。なにしろ林紓の名前を冠した国際学会が開催されるのだ。そこに変化があると感じているに違いない。いままで設定されていた評価基準は、少しだが明らかに変更されている。

冒頭の陳平原「古文伝授の現代命運——教育史的林紓」が興味深い。彼が25年前に書いた文章と同じような箇所が出てくる。しかし、微妙な説明が加えられている。

林紓が書いた北京大学の教授たちをモデルにした短篇小説だ。林紓の「荊生」「妖夢」は「明らかに人身攻撃だ[明顯帶人身攻撃]」(6頁)という*2。

この部分は以前の記述と重なる。過去の文章は次のとおり。

1917年、胡適、陳独秀らが『新青年』において新文化運動を提唱すると林紓は文章を書いて反対し、さらに小説を作り当てこすって攻撃した[1917年，胡適、陳独秀等在《新青年》倡導新文化運動後，林紓著文反对，并作小説影射攻撃]*3

林紓が攻撃したという見解は昔も今も変化しない。

ただし、現在はここに追加説明がある。王敬軒(錢玄同)と劉半農の「なれあいの芝居(双簧戲)」を出してくる。「これは林紓が小説を書いて陳独秀、胡適らを罵ったのと五十歩と百歩の違いしかない[這与林紓写小説罵陳、胡、不過是五十歩与百歩的差別]」8頁。

林紓からの一方的な攻撃だとしていた記述から、文学革命派の行動に対しても一定の疑問を呈する方向に修正したように見える。あるいは以前から考えていたことを公表できるようになった。

『新青年』第4巻第3号(1918.3.15)に掲載された陳独秀と劉半農の「なれあいの芝居(手紙)」である。林紓批判の起点であり基礎となった。その直後に胡適が同じ『新青年』第4巻第4号(1918.4.15)において劉半農の用語を訂正しながら追認するという展開だ(後述)。

陳平原の論文は「なれあいの芝居(手紙)」に言及している。しかし、奇妙なのは劉半農が批判した林紓『吟辺燕語』に触れないことだ。つまり、のちに林紓批判の根拠となる「戯曲と小説の区別がつかない論」を説明しない。それがもとから成立しないことを言わない。言わないのは、そうは考えていないからだろうか。

これで思い出すのは、張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也』(2012)^{*4}だ。該書は、林紓を再評価する。だが、「区別がつかない論」については説明しない。陳平原に先行して同じ判断のように思われる。そういえば、林佩璇「林紓」(2017)^{*5}も同様に無視をしていた。いずれも奇妙に一致するのが印象的だ。

問題はやはり「区別がつかない論」に収斂する。

陳平原の論文には「なれあいの芝居(手紙)」がある。だが、「区別がつかない論」は存在していない。知らないのかといえば、それはあり得ない。なぜならば樽本照雄『林紓冤罪事件簿』(2008)と『林紓研究論集』(2009)を掲げて

いるからだ(32頁)。樽本本の主題のひとつが「区別がつかない論」である。存在を知っている。だが敢えて取りあげない。

以上の状況を見て私が判断するのは、中国学界においてそこは立入禁止区域ではないかということだ。そうならば納得する。陳平原の林紓に対する見方が、現在の中国学界の現状を示しているのだろう。

一般の研究者は、なにを手がかりにして林紓に関する執筆許可範囲を知るのだろうか。そのひとつが陳平原論文ではないかと私は推測する。中国の研究者は学界の風向きを読む。ひとりの文章が後の方向性を示す。これが従来からある中国学界の見なれた光景だ。ただし、陳平原論文について当たっているかどうかは知らない。証明のしようもない。あくまでも私の感想にとどまる。

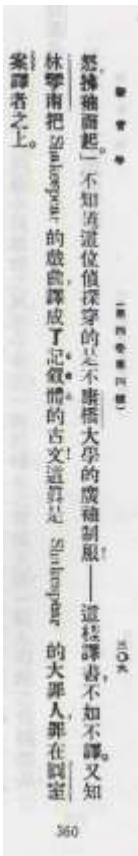
つづくのは夏曉虹「一場會發生的文白論争——林紓一則晚年佚文的發現与釈読」である。未公開の文章を発掘して新しい発見がある。とてもよい。

新発見の文章は、失われたはずの張銘「読<益世報>芸渠<偶談>書後」(1924。題名のカッコは夏曉虹のママ)という。王芸渠が『益世報』に発表した「偶談」についての(実質は林紓の)読后感だ。『晨报副刊』に渡したが主編の孫伏園の反対で掲載されなかった(35頁)。

文中にある「百人の胡適之」は胡適だし、「千の某雑誌」は『新青年』を指す。その批判には負けないと林紓はいう(37頁)。それらの単語が胡適「建設的文学革命論」(『新青年』第4巻第4号 1918.4.15)を示しているのはすぐにわかる。胡適の主張は古文ではなく白話を使用して翻訳せよというものだった。

夏曉虹は胡適の論文が基礎になっていると指摘する。正しい。次の箇所を引用しているのはもっと興味深い。

又知[如]林琴南把 Shakespeare^{ママ} 的戯曲, 訳成



了記叙体的古文！這真是 Shakespear 的大罪人，罪在《圓室案》訳者之上。43頁

「[如]」は夏曉虹の注である。原文の誤りを正した。シェイクスピアの名前が英語で2ヵ所に出てくる。前の「Shakespeare」は胡適の原文ではない。夏曉虹の引用間違いだ。後ろの「Shakespear」と同じく現在表記しているのとは異なり末尾の「e」を欠いている。胡適は確かに「Shakespear」と綴っているのだ。影印本から該当部分を示す。シェイクスピアの原語綴りにご注目いただきたい。誤植ではない。そう表記するラム『シェイクスピア物語』がある（ネットから引用）。

体の古文で翻訳した。だから「シェイクスピアにとっての大罪人である」となる。林紓が古文を使って翻訳したことについて胡適は批判をした。

胡適はなぜここで Shakespear を出してくるのか。夏曉虹は説明していない。これには文章公表の前後関係が存在するのだ。

胡適の「建設的文学革命論」は、その同誌前号に掲載された文章を直接継承している。すなわち、前出『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）の王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居（手紙）」にほかならない。

劉半農は林訳『吟辺燕語』について次のように林紓を批判した（傍線省略）。

吟辺燕語本来是部英国的戲考，林先生於『詩』『戲』兩項，尚未辨明，其知識實比『不辨菽麥』高不了許多； 274頁

劉半農は『吟辺燕語』を根拠にして林紓を批判している。のちにいう「区別がつかない論」の原型を提出した。

上記の文章の鍵語は『吟辺燕語』「戲考」「詩」「戲」および「不辨菽麥[豆と麦の区別もつかない]」である。

林紓の知識は「豆と麦の区別もつかない」よりもまったく高くないという。最低だという意味だ。

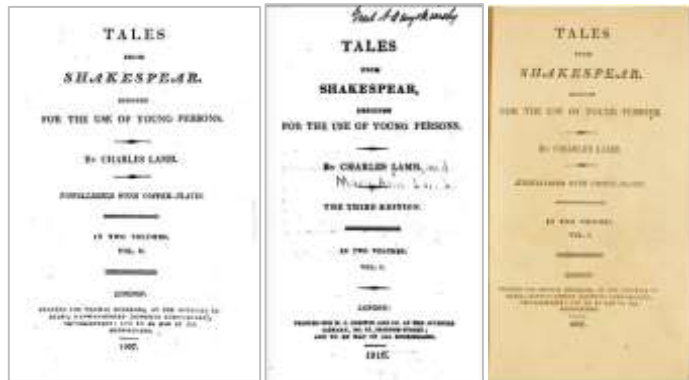
劉半農の文章は冒頭を読み飛ばしてしまいそうになる。「吟辺燕語はもとは英国の戲考である」というなんでもなさそうな表現だからだ。

『戲考』とは、上海・中華図書館が1913年から出版しはじめた京劇の脚本集だ。そこから劉半農は『吟辺燕語』の原本は莎劇そのものだと考えていることになる。だから「詩」と「戲」のふたつを区別できない。「豆と麦の区別もつかない」となり林紓批判が出現する。『吟辺燕語』はあくまでも莎劇から直接小説化したものでなければ劉半農の批判は成立しない。彼はそ

上記の「e」を欠いた綴りは、胡適が『吟辺燕語』の底本がラム本であることを知っている証拠となる。しかし胡適は、その事実を意図的に隠蔽した。知らぬ顔をしなければ劉半農を弁護することができない。

夏曉虹が上の文章を引用した目的は、胡適が林紓と『圓室案』の訳者を区別しているこというためだ。私は、それとは違う文脈で上の胡適の文章に深い興味を感じる。

林紓は戯曲を「記叙体」すなわち散文（小説）



れを強調した。

劉半農のいうところから従えば「詩」と「戯」が対立する。両者を対立させているのだが、ここには矛盾がある。くり返せばもとの戯曲(莎劇)を小説に漢訳して『吟辺燕語』になった。そういう関係でなければ林訳批判につながらない。だが、もとの戯曲を「戯」で表記してしまうともうひとつの「詩」とは何かがわからなくなる。当時の中国でもシェイクスピアは詩人である。莎劇は詩の形式で書かれているから当然だ。だから、劉半農のいう「詩」は莎劇そのものになる。すると劉半農が提出するのは「莎劇」に対立する「戯曲(莎劇)」になってしまう。これでは論理的に成立しない。「豆と豆の区別がつかない」では矛盾する。「豆と麦の区別もつかない」どころではない。その論理的な不整合にいち早く気づいたのが胡適であった。

重要な箇所だからもう一度関係部分の原文を引用する。

林琴南把 Shakespear 的戯曲，訳成了
記叙体的古文！這真是 Shakespear 的大
罪人

胡適の主眼は「古文」批判にある。だが同時に劉半農の記述に矛盾があることを理解してその箇所を書き直したとわかる。林紓は Shakespear の「戯曲」を翻訳して「記叙体」すなわち散文(小説)体にした。

劉半農が示した「戯」は「戯曲」のまま。しかし「詩」では論理が成立しないから胡適は「記叙体」に変更した。「詩」と「戯」を入れ替えても同じ。これではじめて「戯曲と小説の区別がつかない」となって論旨がかみ合う。

胡適は林訳『吟辺燕語』がラム本を底本にしていることを知っている。その証拠は Shakespear とラム本の綴りを書いているところだ。事実を知っているながら林紓は戯曲を小説体で翻訳したと書いた。劉半農とおなじく虚偽にもとづいた

批判である。「シェイクスピアにとっての大罪人である」と誇大に表現して林訳批判をはじめた劉半農を追認し支持した。

この部分について瀬戸博士の指摘があるので引用する(注釈番号は省略)。

翌月、胡適は「建設的文学革命論」を『新青年』第四卷第四号(一九一八年四月)に発表し、ここでも林紓のシェイクスピア紹介に触れ「林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文で訳した。本当にシェイクスピアの大罪人だ」と述べた。胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい。ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう。これが胡適の錯覚であるのは樽本氏の指摘の通りである。しかし小説化された底本が明記されていない以上、当時の条件では胡適を一方向的に責めることはできないであろう。99頁⁶⁶

瀬戸博士の説明で奇妙なのは、劉半農の林訳批判について『吟辺燕語』ではなく「一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」とする箇所だ。劉半農がわざわざ『吟辺燕語』を出しているのになぜここに『雷差得紀』を挙げるのか。意味不明。

「胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい」という。ならば、林紓はラム本にもとづいているから漢訳が小説になるのは当然だ、と胡適はなぜここで書かなかったのか。そうすれば林訳批判にならないことを胡適は承知していた。胡適はラム本を知っていて知らぬ風を装ったのだ。これについての理解力が瀬戸博士には不足している。

また論文の時間的流れという前後関係を読みとることができなかった。『吟辺燕語』を掲げた劉半農に続いて出てきたのが胡適の論文だ。

それらはつながっていると知るべきだ。

なによりも、林訳『雷差得紀』などについて瀬戸博士は別の箇所で『吟辺燕語』と異なりほとんど反響を呼ばず、初出のままに終わり単行本発行あるいは再刊行はされていない(93頁)と書いている。「ほとんど反響を呼ば」ない作品を根拠にしては説得力もなければ意味もない。

さらに瀬戸博士は「小説化された底本が明記されていない以上」と述べる。ラム姉弟の名前を出さなかった林紓に責任のすべてを押しつけた。林紓を批判する加害者が被害者になりすました瞬間である。逆にいえば、批判されて被害者であった林紓が加害者に変身するということだ。

五四直前から陳独秀は保守派から攻撃を受けていると主張していた。林紓を攻撃しながら林紓に攻撃されていると言い張ったのだ。林紓を保守派の首領と認定して無理やり引きずり出したのは王敬軒(銭玄同)と劉半農の「なれあいの芝居」にほかならない。それまで林紓の存在などほとんど注目されてはいなかった。

加害者であるにもかかわらず被害者を装うのは文学革命派の基本姿勢である。

瀬戸博士は調べることが仕事であるはずの研究者としての責任を放棄している。中国学界の動向に事大する瀬戸博士の研究姿勢を照射して十分だ。林訳について(田漢漢訳『ハムレット』を含めてもよい)新しい発見をするつもりも努力もしないのが瀬戸博士だ。反論するために反論する。そのためなら何でも使う。瀬戸博士のやり方は、林紓を批判するためなら虚偽であろうが利用しつくす中国の文学革命派と内実は同質である。

銭玄同と劉半農がつくりあげた「なれあいの芝居(手紙)」にしてから虚偽である。それを追認支持した胡適の該当部分も虚偽にまみれている。敵と認定した相手に対しては虚偽行為も平気で犯すのが文学革命派のやり方だった。し

かし中国においては、これこそが中国文学史上、評価する価値のある賞賛し誇るべき正当な行動だった。そう認定されている。私は大きな疑問を持つ。

夏曉虹は、せっかく胡適の特徴的な一文を引用しながらその背景、前後関係については説明をしていない。立論の趣旨には関係がないという判断なのだろう。

中国の近現代文学研究を代表するふたりの北京大学教授がともに林紓の「区別がつかない論」に言及しない。論文の主旨が違うことはわかっている。だが、ふたりとも「区別がつかない論」を見ながら口を閉ざしそのまま通過しているようにしか思えない。2014年当時は触れるべきではないという認識があったのだろう。だからこそ立入禁止区域だと私はいう。

陸建徳「文化交流中“二三流者”的非凡意義——略説林訳小説中の通俗作品」は銭玄同と劉半農の「なれあいの芝居(手紙)」について次のように説明する。

「銭玄同と劉半農は「なれあいの手紙」事件を作り出して悪意をもって林紓を攻撃したが、これはまったく誇大宣伝の性質のものであり職業道徳に違反しておりその影響は大きいものがあつた[銭玄同と劉半農製造“双簧信”事件悪意攻撃林紓、純屬炒作性質、有違職業道徳、其影響却是深遠的]」81頁

そう指摘するのはよい。だが、林訳『吟辺燕語』についての説明がない。

また、鄭振鐸が1924年に林紓の逝去後に発表した「林琴南先生」から引用するのもよい。だが、鄭振鐸の「区別がつかない論」に言及しない(82頁)。

陸建徳は、長年定説となっていたよく見なれた説明をここでもしている。①は欄外注釈だ。引用翻訳しておく。

林訳小説のなかで歴史類が多くの割合を占めている。彼が陳家麟と共訳したシェイ

クスピア戯劇5種はすべて歴史劇(翻訳は戯劇をもとにした物語にすぎない)である [林訳小説中歴史類占有很大比重, 他与陳家麟合訳莎士比亞戯劇五種, 全部是歴史劇(訳本只是戯劇本事)]. 93-94頁

①林紓は小説の形式でシェイクスピア戯劇を翻訳して人々に非難された [林紓以小説型式翻訳莎士比亞戯劇, 為人所詬病]。

94頁

まだこんなことを書いているのか。これが私の正直な感想だ。

林訳莎劇については1924年に鄭振鐸が指摘したのがはじまりだった。林紓は莎氏の歴史劇を小説にかえて翻訳した。くり返すが、林紓は戯曲と小説の区別がつかなかった「区別がつかない論」である。中国学界では83年もつづいた定説であった。

だが、鄭振鐸の主張が間違っていたことは、2007年に明らかにされている。林訳の底本はクイラー=クーチの『シェイクスピア歴史物語』である。林紓は莎劇を小説化して翻訳していない。底本の小説を翻訳して小説になっているだけだ。批判される根拠はない。林紓にしてみれば濡れ衣、冤罪である。陸建徳の論文は2014年の学会で公表配布されたのだろう。新発見があつてすでに7年も経過している。その結果がこれだ。

陸建徳は中国社会科学院文学研究所に所属しているという(所長。専門は英米文学)。中国学界の中心的研究機関のひとつではないか。陸建徳は外国人著作の漢訳を含めて中国国内の研究情報の収集には積極的なようだ。しかし、外国における生の研究動向には鈍感と見える。それにしても出席者たちからの指摘はなかったのだろうか。論文審査をして通過させた関係者もこれについては知識を持っていなかったことがわかる。学界として学術情報を共有しようという考えはないらしい。いろいろと疑問が出てく

る。

学界の定説を信じこみ問題が存在することにさえ気づいていない研究者がいる。林紓の翻訳を論じる陸建徳を見てあらためて実感することだ。

王勇「林紓与杜亜泉」も王敬軒(錢玄同)と劉半農の「なれあいの芝居」について説明している。

(王敬軒と劉半農の問答) これこそが現代文学史上で興味津々に語られる「なれあいの芝居」あるいは「なれあいの手紙」である [這就是現代文学史上津津樂道的“双簧戲”或“双簧信”]。337頁

これが文学史で見られる以前からの表現である。楽しみに林紓を罵って当然であるという態度だ。

ただし、現在の王勇による説明には少しの変化が見える。次のとおり。

この「なれあいの芝居」が以前にはいかに文学史家より称賛されたか、また現在は少ない研究者によってその手段の卑劣さがいくらかは批判されているとはいえ、その結論からいえば白話文学の影響を確実に拡大したし、社会の関心を引き起こし、また違う意見を持つ者の反対をも巻き起こしたのだった [不管這場“双簧戲”以前如何被文学史家所称道, 現今又如何被一些研究者批評其手段之卑劣, 僅就其結果而言, 確實擴大了白話文学的影響, 引起了社会的關注, 也引起了一些持不同意見者的反对]。337頁

「なれあいの芝居」が卑劣な手段であったことをいう研究者がいる。そう指摘することが変化だといえないこともない。

また、劉半農は林訳の不足を数えあげたことにも言及する。すなわち、1 価値のない作品

を翻訳した、2 誤り、削除、改変が多すぎる、3 外国ものを中国化してしまった。これに対して王勇は、劉半農の指摘は事実ではないし公平ということとはできない、と否定する。逆に積極的に評価するのだ。

林紘の翻訳がすべてすぐれた作品であるということとはできないが、少なくとも相当な部分は時間の試練を乗り越えることができたし、当時の文学の翻訳として最高水準を代表していた[我們不能說林紘的翻譯件件都是精品，但至少有一大部分是經得起時間考驗的，代表了那個時代文學翻譯的最高水準]。338頁

王勇は、劉半農の主張を批判しているのは明らかだ。

ところが王勇の立論にはやはり欠落がある。「なれあいの芝居」を取り上げ、そこに『吟辺燕語』が提起されている(337頁)にもかかわらずそれ以上筆を進めない。劉半農が林紘を批判して述べた例の「豆と麦の区別もつかない」を無視するのだ。劉半農の林紘批判の重要な要素である「戯曲と小説の区別がつかない論」そのものである。これを取り上げてこそ林紘擁護になるという考えが王勇にはないらしい。

こまかいことだが指摘しておく。『東方雑誌』に掲載された「空谷佳人」を林紘訳とする(335頁)。誤り。雑誌初出は訳者不記である。1907年に単行本になったとき(英)博蘭克巴勒著(仮名。空谷blank valleyを音訳したもの)、商務印書館編訳所訳と表示した。架空の人物を原著者のように装わせるだけ。

以上を見ればおおよその研究状況がわかる。現在の学界では「なれあいの芝居」を取り上げることができる。だが、「戯曲と小説の区別がつかない論」に踏み入ることはない。

鄭振鐸のいう「区別がつかない論」は中国学界では立入禁止区域ではないか。その推測はや

はり当たっているかもしれない。それより前に立入禁止区域があることさえ認識していない可能性もあるだろう。

2014年当時の林紘評価は以上のとおりだ。本稿は、2017年の「翻訳家としての林紘——「区別がつかない論」の現在」につながる。

『天演論・茶花女遺事』壹佰貳拾年紀念特蔵(北京・商務印書館2017.3)には林紘『茶花女遺事』が影印されている。それにつけられた陳建華「序二」は嚴復とともに林紘を高く評価する。基本的には林紘再評価の方向で動いているのだろう。



林紘評価がどのように動いていくのか、今のところ判然としない。興味をもって見ていきたい。 罫

【注】

- 1) 吳仁華主編『革新与守固——林紘國際學術研討會論文集』北京・商務印書館2017.5

目次は以下のとおり。

吳仁華「前言」

陳平原「古文伝授の現代命運——教育史上的林紘」

夏曉虹「一場會発生的文白論争——林紘一則晚年佚文的發現与釈読」

宋声泉「文学革命時期“林紘敗北”問題新探——兼論共和話語与新文学合法性的建立」

- 陸建徳「文化交流中“二三流者”の非凡意義——略説林訳小説中の通俗作品」
- 黄錦珠「林訳言情小説《巴黎茶花女遺事》の日常性」
- 劉城「林紓《韓柳文研究法》の學術史意義」
- 郭丹「林紓の楚辭讀本与楚辭批評」
- 朱曉慧「心頭未蓄風波險，一任蒲帆向那邊——從《畏廬詩存》題画詩看林紓的生命情調」
- 胡全章「詩世界里先維新——林紓《閩中新樂府》的詩歌史意義」
- 徐瑛「身世原非杜拾遺，淒涼偏説拾遺詩——試析杜甫对林紓詩歌創作的影響」
- 盧仁龍「画壇又譜広陵散——《<林紓書画集>序》」
- 林農「略論林紓的繪画」
- 王少羽「西方文化的引薦者与国学傳統的衛道士——林紓晚年談中西方繪画」
- 鄒自振「林紓与近現代之交的閩都戲劇」
- 宋一明「林紓致陳宝琛三札考釈」
- 蘇建新「交友——結社——從師：琴南先生在榕生平軼事考辨簡評」
- 郭道平「嚴復、林紓交遊考論」
- 王勇「林紓与杜亜泉」
- 包立民「《林紓家書》和家教」
- 吳仁華、郭丹「林紓的文化品格与大学文化建設」
- 2) 6頁注3に「妖夢」の『新申報』掲載を「1919年3月18-22日」と誤る。3月19-23日が正しい。陳平原が誤ったのは実物で確認せず『林紓研究資料』85頁にある誤記を写したからだろう。
- 3) 以下の2種類で同文。陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻(1897年-1916年) 北京大学出版社1989.12。271頁。また、『中国現代小説的起点——清末民初小説研究』北京大学出版社2005.9。283頁
- 4) 張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晚年林紓的困惑与堅守』太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1
- 5) 林佩璇「林紓」方夢之、莊智象主編『中国翻譯家研究(歴代卷)』上海外語教育出版社2017.4
- 6) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29

田漢漢訳『ハムレット』の底本2

荒井由美

3 劉瑞論文

莎劇『ハムレット』の完訳は田漢によってなされた。一般の書籍ではこれくらいの説明で終わる。事実だからそれでよい。日訳からの重訳という不確かなものを出さないだけ研究者としてはかえって誠実だといえることができる。いちいち紹介するまでもないので注にまとめておく*11。

それらの中にあつて、劉瑞「日本訳莎活動影響下的《哈孟雷特》翻譯」(2016)*12は一步深めて検討しているところが新しい。「深めて」というのは、英語原文、坪内逍遙日訳と田漢漢訳の3種を比較対照していることを指す。

劉瑞の紹介によると日本坪内逍遙訳からの転訳説が複数あるという(39頁)。名前だけを引く。孫大雨(1987)、楊義と李憲瑜(2009)、陳啓明(2008)などだ。

上にあげていない論文の具体例をひとつだけ紹介しよう。

李春江『訳不尽の莎士比亞：莎劇漢訳研究』(2010)*13だ。内容は、田漢が『ハムレット』を漢訳したが、それは坪内日訳にもとづくもので莎氏の原著ではなかった。そういう説明だ。

1921年、田漢在《少年中国》第2巻第12

期上发表了用白話翻譯的《哈孟雷特》, 這是莎士比亞戲劇的第一個中文全訳本, 它标志着中国的莎士比亞翻譯与研究工作又進入了一個嶄新的階段。不過他所依據的是日本人平内逍遙的日文訳本, 不是莎氏原著。40頁

李春江も雑誌初出の題名を誤る。また、『少年中国』に掲載したのは『ハムレット』の冒頭部分だけだ。それを「シェイクスピア戲劇の最初の中国語全訳本」と書いて単行本との区別がついていない。中華書局から出した単行本の説明がない。読み飛ばしそうになるが奇妙な説明だ。さらに、坪内を平内と誤記する。日本語が不自由なのだろう。そうして田漢が依拠したのは莎劇そのものではないと強調する。坪内日記についての具体的な説明がない。またそれによったという証拠を提出しない。自分で独自に検討したかどうかは不明。先行論文を不完全に引き写したのか。

日記からの重訳説については、漢訳の実物を見れば疑問がすぐに出てくる。

田漢は雑誌初出の「代序」に莎劇原文の一部を引用している(後述)。ここを読めば日記重訳説が出てくる余地はない。だから李春江も引用を引用しているだけではないか。あるいは実物で確認せずに論じているのではないか、という疑惑が生じる。

田漢は単行本の別「訳叙」においてもハムレットの独白を引いている。“t [T]o be or not to be, that is a [the] question.”と誤植が2ヵ所あるにしても英文のままだ。この著名な台詞を田漢が間違っただけを知らない。

田漢が莎劇の英文を示しているにもかかわらず李春江は平[坪]内逍遙の日本語訳本に依拠したと説明する。これは理解するのがむづかしい。英語原文を見せているのだから田漢は莎氏原作を英文で読んだだろう。普通はそう考える。それとも李春江は田漢単行本で確認していないの

だろうか。

劉瑞論文にもどる。

細かいことだが指摘しておく。田漢漢訳の雑誌初出題名を「哈孟雷特」と間違ふ。根拠は李長林と楊俊明の論文だとする(38頁)。了解しがたい。劉瑞は田漢単行本を見ただけで雑誌は手に取らなかったということだろうか。中国では『少年中国』そのもの、あるいは影印本を入手することが困難なのかもしれない。全部だとはいわない。だが、多くの論文が同じように誤記するのは奇妙な感じだ。

劉瑞は前述のように莎劇原文、坪内、田漢を比較対照していくつかの例を示した。従来の研究者よりも詳しく検討した。これは高く評価できる。

その結論はこうだ。田漢は莎氏の原著から直接に逐語訳する方針で翻訳した。その翻訳過程で坪内逍遙1909年の日記本を参考にした(41頁)。ほぼ妥当な結論だと思う。

ただし、説明が不足する部分がある。田漢は莎劇原文にもとづいて漢訳したのはいい。ではその莎氏の原文とは何版なのか。劉瑞は説明しない。つまり、重要な探索がなされていない。劉瑞が引用する英文は参考文献で示している梁実秋の中英対照本^{*14}のようだ。ならば梁実秋が使用した莎劇原文についてひとこと説明すべきだった。

もうひとつ。劉瑞は坪内日本語訳本だけしか提出していない。そこにはためらいもなければ説明もない。いきなり坪内日記本であると決めつけている。その根拠はなにかを言わない。なぜ坪内なのか。先行論文が坪内しか掲げていないからかもしれない。だが、参照した日記本は坪内本だけだったのか。ほかにも日記本があったのではないか。いくつかの可能性を示して絞り込む必要があった。底本を特定するばあいには必要な手続きがある。そこまで想像力は働かなかったようだ。残念なことだった。

また後述するが田漢単行本には説明に不思議

な箇所がある。書名と著者名の英文表記、あるいは田漢「訳叙」に引用する「某莎翁学者」、また紹介された沙翁の略歴など。これらについて劉瑞は解説しない。そこまでは調査が及ばなかったものと見える。

本稿は、日訳からの重訳説を提出する論文については掘り下げない。目的は、田漢漢訳『ハムレット』の底本そのものを追究することだからだ。

4 手がかりとしての単行本『哈孟雷特』

田漢漢訳『ハムレット』を日本語訳と結びつける。その考えは、彼が日本に滞在していた事実と無関係ではない。日本人との交流もあった。ゆえに田漢は、日本における莎氏と莎劇についての研究動向を知っていただろう。その影響を受けていないはずがない。そう推測するのは自然の流れだ。

田漢が使用した、あるいは参考にした各種書籍を追跡する必要がある。言うのは簡単だ。しかし、実行した人はいない。

莎氏と莎劇について多数の研究文献が日本にもある。これに加えて英語で書かれた参考書が存在するだろう。田漢が見た関係書を探すには大きな困難があるのはいうまでもない。今まで誰も探索に着手していない理由だ。

絞り込めば現在のところふたつの資料が基礎になる。すなわち、田漢漢訳『ハムレット』の雑誌初出と単行本そのものだ。当たり前と思われるか。ふたつしか存在しないのか、と落胆する必要はない。ふたつもあると考えれば後の調査につづく。

この資料2件には、いくつかの手がかりが示されている。実物を見ればすぐに理解できる。しかし、従来の研究者は、それを手に取ったかもしれないが検討はしなかった。引用したが追究はしなかった。発想がなかったのだろう。底本探索が進まなかった理由だ。日訳にしろ莎劇

原文にしろそれらを特定するための手続きを踏んでいないということでもある。

漢訳の底本を特定しようとする研究者は多くない。ほとんどの人が先行文献を引用して終わりだ。イソップ、アラビアン・ナイトなどの例でわかっていた。そういう研究環境の中では田漢漢訳『ハムレット』も例外ではなかった。

まず、単行本から問題になる箇所を簡単に指摘しておく。疑問だけを先に抽出提示し説明はあとにする

扉前に書名と著者名の英文表記がある(影印本には未収録。写真は後掲。以下同じ)。

THE / Tragicall Historie of / HAMLET / Prince of Danmarke. / By William Shake=spere.

このページは初版と後版では配置場所が異なる。それはよいとして、表記されたその英語綴りが現在とは異なる。一見してかなり古いことに気づく。そのはず、莎劇原本の初期になる第1クォート(Quarto 四つ折本、1603)、第2クォート(1604)に見える表記だ。のちのフォリオ(Folio 二つ折本、1623)とは違う。

普通に考えて日本にいる田漢がこれらの貴重本を実物で見たとは想像できない。

坪内逍遙は次のように書いている。「就中、一六二三年の第一フォリオ全集の如きは、十数年以前ですら三千ポンド以上(三万圓以上)で売買されたといふから、今日では、価格が倍加したであらうのみならず、恐らくもう市場には出ないであらう」「第一フォリオの複製版は、私は不幸にして毎に入手の機会を失つたので、まだ早大図書館にも演劇博物館にも備へ附けてないが、一六三二年の第二フォリオの複製は幸ひに早大だけでも二部ある。クォートの複製の如きも既に幾回となく出来てゐるのだが、それらも早大にはない」^{*15}というくらい当時の日本では貴重な版本だ。

莎氏の綴りはいくつかある。Shake=spere

と分割して表記するのは現在ではすたれてしまった。

これら原文の題名と署名はどこから引いてきたものか。これが最初の疑問だ。田漢は説明していない。

単行本の「訳叙」(雑誌初出の「訳叙」とは別物)は、「某莎翁学者」が莎氏とイブセンを論じたとカッコを使用して紹介する。この引用文はどの文献から持ってきたものか。また「某」とは誰のことをいうのか。なぜ「某」とだけ書いて実名を出さないのか不可解だ。出したくない理由があるのかもしれない。それならばいつそのこと引用しなければよいのに、と思う。田漢にとってはどうしても紹介したかった文章なのだろう。

つづけて莎氏の生涯を習作期、喜劇期、悲劇期、老成期と区分けする。

中国において莎氏と莎劇について解説する文献は田漢以前にまったくなかったわけではない。といってもせいぜいが「海外奇譚叙例」に「英国索士比亜 Shaksper^マe」と示し、生卒年、俳優で詩詞(すなわち莎劇)に優れていたと説明しているくらいのものだ。

ついでに触れる。上にある Shaksper^マe という綴りが間違っていると指摘する研究者宋莉華がいる。表記が異なることを根拠にして漢訳者の無知を批判するのだ。そういう宋莉華のほうが無知である。Shaksper^マe を著者名に掲げる版本が実在していることを知らないだけ。

その『海外奇譚』を田漢が読んでいたという証拠はない。林訳『吟辺燕語』ほどには有名ではなかったからだ。

または人名録の類がある。

華亭雷瑄編輯『各国名人事略』(1905再版)^{*16}にシェイクスピア(脩苦吾匹亜)を収録する。人名辞典という性質上それほど詳しい説明ではない。

王国維「莎士比伝」(1907)^{*17}がある。林訳『吟辺燕語』の漢訳題名を使用しながら莎劇

(王国維は劇詩と称する)を列挙している。莎氏の経歴についてそれ以前の文章よりは格段に詳しい。

田漢は莎劇について習作期、喜劇期、悲劇期、老成期と4区分した。王国維も同じく4期にわけると同じだ。しかし、その説明内容は田漢とは異なるだけ言っておきたい。

田漢漢訳『ハムレット』が公表される前だから次の文章があることにも触れる。東潤「莎氏楽府談」(1917-18)^{*18}である。内容はその論文名にあるとおりに主として莎劇について論じる。長篇論文だが、莎氏の生涯については簡単に述べるだけ。田漢が日本に来たのは1916年だった。日本にいて上海で公表された朱東潤の論文を読んだかどうかはわからない。朱東潤の文章は、田漢が紹介した莎氏の略歴とは異なる。当時田漢は読んでいないだろうと推測する。

中国における莎氏の研究状況は相当にお寒いものだった。日本はそうではない。だから田漢は日本でどのような書物によって研究したのか。これが問題になる。管見によればそれらについて指摘した研究論文を見つけることができなかった。

簡単に検討しただけで以上のような疑問が生じている。それらがすべて底本探究の手がかりになる。

5 日本語訳『ハムレット』から

要点はふたつある。田漢漢訳『ハムレット』単行本(1922)は中国最初の全訳であること。もうひとつ。田漢は日本に滞在していたこと。それは1916-22年のあいだ、彼が18歳から24歳までの長期間にわたる。日本での『ハムレット』翻訳、研究と田漢漢訳とのあいだには密接な関

係があったであろうと予想される。

莎劇原作について初期のクォート、フォリオに溯ることはしない。もとが貴重本だ。前述のように田漢がそれらを手にしたとは考えられない。漢訳の底本にしたのはずっと後に出版された多数の版本のいずれかだろう。これが出発点だ。

田漢が日本で見たと考えられる日訳本は限られてくる。ラム本ではなく莎氏の戯曲(莎劇)をもとにした日本語訳、それも完訳である。さらには田漢漢訳以前に出版された単行本だ。そうならば多くはない。

河竹登志夫『日本のハムレット』(南窓社1972.10.31)、国立国会図書館『第73回常設展示 ハムレットを日本語で』(1996 電字版)、榎原貴教「ハムレット翻訳作品年表」(電字版)などを参考にして国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した。

土肥春曙、山岸荷葉翻案『莎氏悲劇 ハムレット』(富山房1903)あるいは山岸荷葉翻案『沙翁悲劇 はむれつ』(春陽堂1908)などは日本化している。田漢漢訳の参考にはならないように思える。

要件を満たす日本語『ハムレット』完訳本は、次の2種類に絞ることができる。

1 戸沢姑射(正保)、浅野馮霊(和三郎)共訳 沙翁全集第1巻『ハムレット』大日本図書株式会社 1905.9.8(以下戸沢、戸沢日訳と称する)

2 坪内逍遥(雄蔵)『ハムレット』早稲田大学出版部1909.12.25/1923.12.10十八版(以下坪内、坪内日訳と称する)



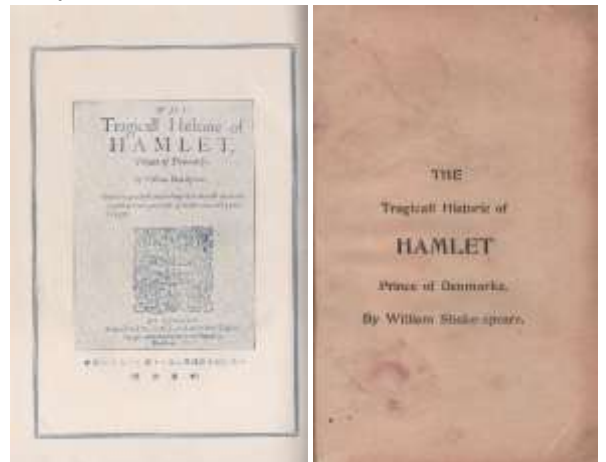
上の書誌は私が所蔵する実物にもとづく。またウェブで読むことができる。

6 戸沢日訳と田漢単行本

戸沢姑射(正保、1873-1955)は、東京帝国大学英文科卒業、のち東京外国語学校長。菊池清(幽芳)は兄という。

戸沢日訳と田漢単行本がつながっている。つまり影響関係があるということだ。それを証明する事柄はふたつある。ひとつは両書の絵図、もうひとつは田漢「訳叙」である。

戸沢日訳に収録されたいくつかの写真図版が興味深い。田漢単行本と共通する箇所があるからだ。



戸沢

田漢

第2クォート版表紙の写真がある。戸沢は1604年と説明するが写真をよく見れば1605年だ。

ふたつを並べると一目瞭然だろう。田漢単行本は第2クォート版写真の文字だけを抜き出した。第2クォート版の写真では Shake の次の s が変形となっている。田漢単行本ではそれを反映して Shake=speare と分かち書きをしたとわかる。

劇中劇の絵画(1842)はダニエル・マクリース(Daniel Maclise、1806-70)作。戸沢日訳と田漢単行本は同じ。ただし、戸沢日訳図版右下に見える Exerr Plar(意味不明)を含めて田漢単行本では掲載時に底辺部分を少しだけ切除した。



戸沢



田漢

すべての絵図が一致しているわけではない。

異なる絵図もある。

戸沢日訳に収録する莎氏立像(Portrait of William Shakespeare、1849)はフォード・マドックス・ブラウン(Ford Maddox Brown、1821-93)作のもの。



Ford Maddox Brown作/戸沢

ラム姉弟『シェイクスピア物語』のひとつ(Collins' Clear-Type Press, 1900?)に収録されているらしい。



TALES FROM SHAKESPEARE. LONDON & GLASGOW. COLLINS' CLEAR - TYPE PRESS. (C/V)

Collins' Clear-Type Press ネットより引用

戸沢がラム本から引用したかどうかは不明だ。

田漢単行本は別の版画に差し替えた。こちらの原画はチャンドス・ポートレイト(The Chandos portrait)と呼ばれる。伝 John Taylor (1585-1651) 画。それを写した。



原画の写し



田漢

田漢単行本で新しく追加した銅版画もある。「幼児シェイクスピアと喜劇、悲劇」と名づけられる (George Romney、1734-1802 画、Benjamin Smith 刻1803)。幼児莎氏がふたりの女性 (喜劇と悲劇) に育てられるという架空の物語を銅版画にしたもの。喜劇の顔はハミルトン (Emma Hamilton) を写したと伝えられる。この銅版画はある版本から引いてきた。後述する。



幼児莎氏 (拡大図)

田漢単行本の莎氏銅版画がどういう版本に使用されたものかは不明。田漢自身が収録を手配したのか。あるいは中華書局の担当編集者の指示かどうかもわからない。もっとも当時、田漢は中国に帰国しており彼自身が発行元の中華書局に勤務していた (『田漢年譜』60頁)。

田漢単行本と戸沢日訳を結ぶもうひとつのものは「訳叙」だ。

7 田漢単行本「訳叙」の問題

田漢単行本と表示するのは雑誌初出の「訳叙」と区別するためだ。本文そのものは長くない。1 頁半のなかで3段落にわかれる。1 段目は「某莎翁学者」が言ったという莎氏の人物描写は油絵、イプセンのそれは大理石という記述だ (後述)。2 段目は莎氏の作者生涯を4分して解説する。3 段目は『哈孟雷特』漢訳にいたる経過を簡述する。

戸沢日訳との関係があるため2 段目から先に説明する。

田漢は莎氏の作者生涯を「(一) 習作期」「(二) 喜劇期」「(三) 悲劇期」「(四) 老成期」に分ける。「(四) 老成期」は題名だけで内容には言及しない。理由は不明。

「(一) 習作期」は単に莎氏24歳から31歳までの時期だと述べるだけ。作品名はあげない。

「(二) 喜劇期」は少し詳しい。以下に引用する (傍線は省略)。

直到三十二歳作『威尼斯的商人』，纔發揮了他作劇的天才。自時而後，縱其如江如海如火如茶的才氣，草成無數世界文壇稀有的喜劇；以此受知於 Southampton, Essex 兩伯爵，及 Pembroke 侯爵：是為第三〔二〕期，莎翁最得意的時期也。然曾幾何時，前日之保護者皆淪於慘境。S., E. 兩伯且坐謀叛一繫倫敦塔，一登斷頭台。莎翁自身也頗受嫌疑，又兼慈父見背，益憂傷抑鬱不能自聊，遂成第三期的各種悲劇，而「哈孟雷特」一劇沈痛悲愴為莎劇四大悲劇之冠。讀 Hamlet 的獨白，to be or not to be, that is a question. 不啻讀屈子離騷。現代多「哈孟雷特」型的青年，讀此將作何感想？ 1-2頁

32歳になり『ヴェニス商人』を書いてようやく劇作の天才を発揮した。この時以後、その大海のような溢れんばかりの猛烈な勢いの才気をほとぼしらせ世界文壇にはまれな喜劇を無数に書いた。それによりサウザンプトン、エセックス両伯爵およびペンブローク侯などに知られた。これが第三[二]期であり沙翁が最も得意な時期である。しかし間もなく昔の保護者はみな悲惨な境遇に陥ってしまった。サウザンプトン、エセックス両伯爵は謀反のためにひとりロンドン塔につながれ、ひとり断頭台に登らされた。沙翁自身も嫌疑を受け、また慈父にも死なれてひどく悲しみふさぎ込んでしまい気をやすめることができず、ついに第三期の各種悲劇を書いた。『ハムレット』という劇が深刻悲惨で四大悲劇の最優秀作である。ハムレットの独白 *to be or not to be, that is a question* を読めば、あたかも屈原「離騷」を読むようである。現代の「ハムレット」型の多くの若者は、これを読んでいかなる感想を抱くであろうか。

ハムレットの著名な独白(冒頭を小文字の t に、the を a に誤る)を引き屈原と現代の若者を出した部分は、田漢の筆になる。だが、上記のように莎氏の伝記を簡単に述べるにあたり田漢が依拠した日本語の文章が存在する。田漢は、それを明記しなかった。

戸沢日訳は浅野和三郎「沙翁評伝」を収録する。これが田漢単行本「訳叙」の種本だ。

浅野は莎氏の生涯を「その第一期」から「その第四期」までに区別する。「一五九五年に出せる「ジョン王」にいたる迄、凡そ四篇を出せり。以上を沙翁の修業時代といふべく、之をその第一期となす」(4頁)が田漢のいう「(一)習作期」に相当する。

浅野「その第二期」から符号「……」を使用し中略しながら田漢「訳叙」と重なる部分を引

用する(傍点は省略。以下同じ)。

一五九六年沙翁が傑作の一なる「ヴェニス商人」出て、この時を以て沙翁の第二期に入る。……(中略。「ヴェニス商人」で見せる莎氏の技量を絶賛する)当時の沙翁は少壮活躍の元気に富み、血湧き腕鳴りて、失敗の何物なるやを知らず、蹉跎の何物なるやを味は、ざりし時代なれば、重みに筆を喜劇に染め、……(中略。具体的な作品名をあげる)是等の諸作は喜劇として世界文壇に匹儔を見ず。……(中略。作劇の内容を評価する)沙翁の一身にとりても、この時代が最も得意幸福の時代にして、渠は是等の諸作によりて財を剩し、名を揚げ、サウザムプトン伯、エセックス伯、ペムブローク侯など、当時有力者の眷遇を受け、又女王の愛顧をさへ蒙りぬ。されど現世の有為転変は、何人の場合に於てもかはることなく、沙翁の身は俄然逆境に沈淪するに至りぬ。渠の保護者の多くは皆失意の境に陥り、中にもエセックスの如きは、叛逆の汚名を負はされて断頭台の露と消え、沙翁自身も多少之れと聯関して、苦楚を嘗めたり。(後略) 4-5頁

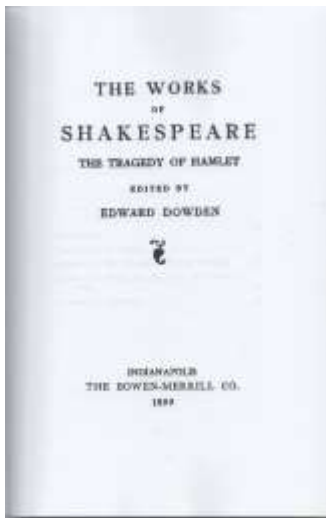
両者を比較対照すると田漢が浅野の日本語にもとづき要点を押さえながら要約していることがわかるだろう。英国貴族の名前は別の資料で英文を調べたようだ。浅野は沙翁と書き、田漢は莎翁として共通する。朱東潤は莎氏としていた。

田漢単行本「訳叙」が戸沢日訳の文章を取り入れていることは明らかだ。では、戸沢日訳『ハムレット』そのものが田漢漢訳の底本なのか。あるいは戸沢が底本とした英文原作が田漢の漢訳した書物か。それほど簡単に解決する問題ではない。さらなる検討が必要だ。

8 戸沢日訳のダウデン

戸沢日訳には「ハムレット」引がある。底本について次のように明記している。「原書は主としてメシユエン社発兌、ダウデン氏校訂の「ハムレット」を採用したり」
私が見ているのは次のとおり。

The works of Shakespeare: the tragedy of Hamlet / edited by Edward Dowden. / London: Methuen and Co., 1899



影印本。ウェブでも読むことができる

訳者である戸沢自身がそう書いている。エドワード・ダウデン編になる『ハムレット』が戸沢日訳の底本であることは確かだ。

ではダウデンが田漢漢訳の底本でもあるのか。それについて私は否定的な見解をもつ。ダウデンは各種テキストの異同を注釈する学術的に価値のある刊行物だ。ただし、挿絵は1葉も収録していない。

もう一度いう。細部に事実が露出している。これが従来から示している私の考え方だ。

例を示す。登場人物の一覧を掲げるのが普通の現行本である。人物の配列を見る。上位3名を抜き出すのはここが問題になるからだ。

【ダウデン】CLAUDIUS, *King of Denmark.* / HAMLET, *Son to the late, and Nephew to the present King.* / FORTINBRAS, *Prince of Norway.*

【戸沢】クロウヂアス (Claudius) 丁抹国王 / ハムレット (Hamlet) 先王の子、現王の甥 / フォーチンブラス (Fortinbras)

戸沢日訳の底本がダウデンだから登場人物の順序が同じなのは当然だ。ところが、田漢漢訳はどうか。

【田漢】克魯底亞斯, 丹麥王。 / 哈孟雷特, 前王之子, 今王之姪。 / 波樂紐斯, 侍從長。

クローディアス、ハムレットの次はポローニアスだ。ダウデンおよび戸沢とは異なっている。田漢漢訳ではフォーティンブラス (華廷普拉斯, 挪威世子) は人物表のだいぶ後ろ、墓堀人のつぎに配列されている。

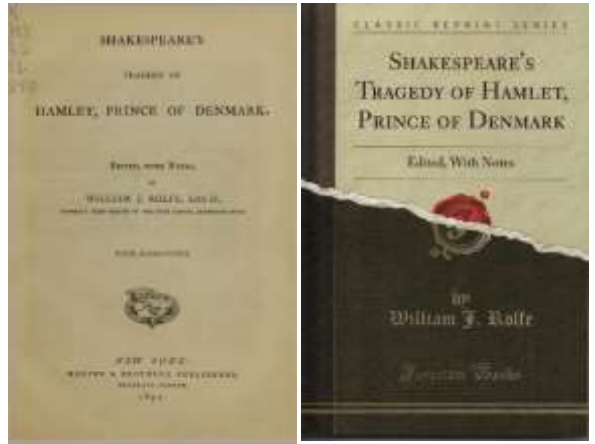
田漢漢訳の底本がダウデンであるならば、人物表の順序を変更したことになる。漢訳にあたってわざわざそういう手間をかけるだろうか。しかも、田漢漢訳の人物表はカーテンを開く小姓の挿絵になっている。



ここが大きく異なる点だ。また、この絵図が重要な意味をもつ。挿絵は底本を探索するときの基本的な手がかりになる(例外だったのは林訳『伊索寓言』)。

ダウデン以外の版本を探さなければならない。戸沢日訳「研究書目」に掲げる次の版本がさらなる探索対象になる。

(a) *The Glove Edition*, edited by Clark and Wright, 1 vol. (Macmillan.) 其価廉にして正確、標準本として愛用せらる。15頁



扉 OPEN LIBRARY より引用/影印本

戸沢の説明によると当時の日本では一般に普及していた版本のようだ。

私が見ているのは 1882 年版のグローブ(Globe Edition)である(*THE WORKS OF WILLIAM SHAKESPEARE*, LONDON: MACMILLAN & CO LTD, 1956 も参照している)。挿絵はない。登場人物の配置は田漢単行本と一致する。しかし挿絵がないから底本ではないだろうと判断した。

9 ロルフとの共通点

いくつか見た版本の中にロルフを見つけた。検討した結果を先にいえば、ロルフが田漢漢訳の底本だと考えて間違いなからう。

SHAKESPEARE'S / TRAGEDY OF / HAMLET, PRINCE OF DENMARK. / EDITED, WITH NOTES, / BY / WILLIAM J. ROLFE, LITT.D., / NEW YORK: HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS, 1890

ウィリアム・ジェイムズ・ロルフ (William James Rolfe, 1827-1910) は文学博士 (Litt.D.)、アメリカの莎氏研究者だという。

田漢単行本とロルフにはいくつかの共通点が

ある。

登場人物表の絵図と掲載順位が同じ。ロルフの特徴のひとつは多数の銅版画を収録することだ。前述したように田漢単行本は戸沢日訳から部分的に引用をしていた。それとは別にこのロルフから登場人物表の絵図と幼児莎氏銅版画を借用している。先に拡大図を掲げた。ここでは田漢単行本からページ全体を再度引用する。



hamlet登場人物表



幼児莎氏 ロルフ/田漢

ハムレットといえば、第3幕第1場に出てくるあの有名な台詞だ。

発行の順にグローブ(1882)、ロルフ(1890)、ダウデン(1899)の該当箇所を示す。語句は同じである。注目してほしいのは符号の使い方だ。さらに戸沢日訳、坪内日訳、田漢漢訳も併記する。参考までに1930年代から莎劇の漢訳を公表している梁実秋訳も添える。

第3幕第1場

【グローブ】To be, or not to be: that is the question: 66頁

【ロルフ】To be, or not to be, —that is the question: 95頁

【ダウデン】To be, or not to be: that is the question: 98頁

【戸沢】定め難きは生死の分別 123頁

【坪内】^{ながら}存ふるか、存へぬか? それが疑問ぢや…… 110頁^{*19}

【田漢】還是活着的好呢, 還不活的好呢? ——這是一個問題: 73頁

【梁実秋】To be, or not to be: that is the question: 134頁

死後還是存在, 還是不存在, ——這是問題; 135頁^{*20}

田漢の「生きるのがいいのか、それとも生きないのがいいのか? ——これが問題だ」の「?」は英文には使用されていない。坪内日訳にはそれがある。田漢がそれにならって付加したものと思う。もうひとつの「——」はロルフと一致する。その符号は他に例を見ない。ついでに、梁実秋漢訳の符号は英文にはない。

語句が同じ版本間では、符号のような小さな部分が重要な意味を持っていると私はいう。

田漢は、戸沢日訳の挿絵のほかに解説を参照したことは述べた。しかし、日訳の「定め難きは生死の分別」では田漢漢訳から離れる。

上記部分だけならば田漢漢訳は、ロルフおよ

び坪内日訳との関連が強いように見える。それを検証するためにもういちど田漢単行本「訳叙」を取りあげる。

10 田漢のいう「某莎翁学者」

田漢単行本「訳叙」にもどる。説明を後まわしにした1段目である。くり返すと「某莎翁学者」が言ったという莎氏の人物描写は油絵、イブセンのそれは大理石彫像という記述だ。

田漢単行本「訳叙」の冒頭を引用する(傍線は省略)。

某莎翁学者拿莎士比亚所描写的人物和易卜生所描写の相比, 謂『莎翁の人物遠觀之則風貌宛然, 近視之是則筆痕狼藉, 好像油画一様; 易氏の人物則鬼斧神斤毫髮逼肖, 然使人疑其不類生人, 至少也僅是人類某一時期中的姿態, 好像大理石的彫像一様。』現在中国の美術館裏大理石彫像可搬来不少了。那麼再陳列一些油画不更豐富些嗎? 所以引起了我選訳莎翁傑作集の志願。1頁

あるシェイクスピア学者が、シェイクスピアの描写する人物とイブセンの描写するものを比較して次のようにいった。「シェイクスピアの(描く)人物は遠くから見ると風采容貌がそれらしいが、近くで見ると筆跡が乱雑でまるで油絵のようだ。イブセンの人物はといえば、鬼神が斧で刻んだように産毛も頭髮も真に迫っているが生身の人間ではないと疑う気にさせる。少なくとも人間のある一時期の姿勢態度にすぎずまるで大理石の彫像のようである」現在、中国の美術館には少なくない大理石の彫像が運び込まれている。ではいくつかの油絵を陳列すればさらに豊富になるのではなからうか。そこで私はシェイクスピア傑作集を選訳する願望を抱いたのである。

田漢単行本「訳叙」2段目が戸沢日訳の所収する解説を要約したものだった。ではこの1段目も戸沢から引用したのではないか。当然そういう推測が出てくる。だが、それは違う。ここは戸沢ではない別人の文章にもとづいてその内容を要約引用した。

カッコで一括りにしているからあたかもまとまった箇所から引いてきたかのような印象をあたえる。それは田漢が施した工夫のようなものだ。「某」として著者名を出さないのもたぶん原文が誰のものか不明確にするための技巧ではないかと疑う。

こちらの引用元は、坪内雄蔵「近松対シェークスピア対イブセン」(1911)^{*21}だ。莎氏とイブセンに分けて2ヵ所でそれぞれを解説している。

これを要するに、シェークスピアの作の人物は一寸見たる所は生きた人間に相違ないやうに見える、手を以て捕へられさうにも見えるが、傍へ近づいて更によく見ると態度や風采や何やかに何処か実物でないと思はれるやうな箇所が目立つて来て、何だか簡粗なやうな所が見える。奥行もありげに見えるが、模糊朦朧として居て、何処迄が奥行だか分らぬ。恰も油絵を見るやうな趣。355頁

イブセンに至つては、前から見ても後から見ても左右から見ても如何にも生きた人間らしく出来て居る。目鼻立ちから四肢五体の末まで明白にはつきりと写し出されてあるが、それが余り明白過ぎて冷やかにいかつく、何となく真に生きてある人間とは思はれない所が見える。少なくともあらゆる人間が常に皆こんな風にして居るのではないと云ふ感じが起る。かう云ふ人間もあるかも知れぬが、是れは或場合に於ける或人間の姿勢である、態度であると思ふ。十九世紀以後の大理石の彫像でもあらうか。

355-325頁

油絵(田漢「油画」)と大理石の彫像(田漢「大理石彫像」)が一致する。田漢の説明は坪内の文章を要約していることがわかる。本来ならばまとめてカッコで囲むものではない。原文のままの引用漢訳ではないからだ。要約したことがわかるような書き方ができなかったのだろうか。

というよりも、これを含めて「某莎翁学者」と書いたのは田漢の工夫だったように思う。つまり、田漢は自分の著作に坪内逍遥という日本人の名前を出したくなかったからではないか。出版当時、日中関係が政治の上で更に悪化していた事情を反映しているのだろう。雑誌初出「訳叙」には易漱瑜と一緒に上野で桜を見物したことを書き込んでいた。だが、単行本ではそれらを削除する。前述のとおり『ハムレット』原書を読んだのが1918年に易梅園と「東京」にいた時だったとわずかに書くだけ。沙翁の伝記を紹介した箇所にもそれが戸沢本にもとづいているとは説明していない。できるだけ日本の影を消去したかったとしか思われぬ。逆に考えれば、表面では消去したくなるほどに奥では深く日本からの影響を受けていたということだ。

11 雑誌初出「哈孟雷徳」

本稿では雑誌初出の「哈孟雷徳」を検討する。田漢は『ハムレット』を日本で翻訳した。単行本にする時訂正したと説明している(単行本「訳叙」2頁)。手を入れる前の漢訳はどういうものだったのかを知りたいと思うからだ。

1 「訳叙」と「代序」

雑誌には「訳叙」(1921.4.16)と「代序」が冒頭に置かれている。

田漢は母方のおじ易梅園(また易象)に連れられて日本にやってきた。のちの妻易漱瑜は彼

の娘だ。

「訳叙」ではその易梅園が死去したことに触れる。長沙において軍閥に殺害されたという(『田漢在日本』441頁)。易漱瑜と桜見物をしておじを偲ぶ。おじの死を知ったときは悲しみと怒りが胸に満ちていたが、少し落ち着いてから莎氏(田漢の用語では莎翁)の『ハムレット』の漢訳に自分の思いを託すことにした。「一九二一年、四月十六日、田漢識於江戸西郊之月印精舎」と記している。三島、上野、江戸と日本に関係する単語を盛り込んでいることがわかる。

つぎの「代序」はおじ易梅園を喪失したことに関係して人間不信の気持ちをハムレットの独白(第2幕第2場)で代弁させる。

注目されるのは原文を引用してそれに漢訳を添えていることだ。英文を示しているのは珍しい。また、重要資料であるにもかかわらずこの原文について説明する論文を見ない。

文章を区切りながらロルフ、戸沢日訳、坪内日訳を掲げる(ルビ省略。以下同じ)。田漢1で雑誌初出を、田漢2で単行本の漢訳を示す。英語原文に異同があるばあい、[]を使う。必要があれば注記する。

【ロルフ】I have of late — but wherefore I know not — lost all my mirth, forgone all custom of exercises ;

【戸沢】さて身は近頃何故にや、たのしいといふ事少しもなく、あらゆる遊戯も廃してすひ、

【坪内】予は近来……何故かは知らねども……悉く歓楽をば失うたわい、諸芸をも廃してしまうた。

【田漢1】我近来——我也不知道為着甚麼緣故——把我一切的歡樂都失掉了，把我一切遊戯的習慣都忘記了；

【田漢2】我近来——我也不知道為着甚麼緣故——把我一切的歡樂都失掉了，把我一切遊戯的習慣都忘記了；

気づくのはロルフと田漢漢訳が使用している符号の場所が一致していることだ。ロルフに「—」と「;」があれば田漢も同じ場所に置く。戸沢にはふたつの符号がない。ただし坪内には「……」はあるが「;」がない。

exercises は身体を動かす運動だが、戸沢は「遊戯」に、坪内は「諸芸」と訳した。田漢は戸沢訳を採用したように見える。「歓楽」は坪内と共通する。custom は田漢により辞書どおりの「習慣」である。英語原文を読んでいるから逐語訳したかったらしく田漢独自の漢訳になった。

【ロルフ】and indeed it goes so heavily with my disposition that this goodly frame, the earth, seems to me a sterile promontory ;

【戸沢】何とはなしの悲しさが深く性根に沁み渡り、此立派な世界も、身には荒果てたる野原と見え、

【坪内】能い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して、地球といふ此立派なる大組織も、予に取つては荒れ果てた岬も同然。

【田漢1】而且实在我的胸臆之間百憂叢集乃至連地球這個盡善盡美的大組織，在我看起來不過一個荒涼的海角；

【田漢2】而且实在我的胸臆之間百憂叢集乃至連地球這個盡善盡美的大組織，在我看起來，也不過一個荒涼的海角；

it goes so heavily with my disposition とは、自分の気質、傾向、性向がひどくなるという意味だ。戸沢はそれを「何とはなしの悲しさが深く性根に沁み渡り」と訳した。一方の坪内は「能い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して」である。田漢は、原文の indeed を「实在」で表わし日本語訳と異なることを示す。彼独自の漢訳である。あとは坪内の「胸臆」を共有し、「憂愁」は「百憂」に「鬱積」は「叢集」へと置き換える。this goodly frame が坪内では

「此立派なる大組織」になり田漢が「這個盡善盡美的大組織」と受ける。「立派なる」は「盡善盡美的」に相当する。「大組織」は坪内と共有する。promontory を坪内は「岬」にしたのを田漢は漢語で「海角」に置き換えた。

田漢の漢語は確かに坪内の用語と共通する箇所がある。坪内の使用する漢字が漢語と同じ意味を持つばあいは、田漢が坪内日訳を参考にし漢訳すれば同じになることもあるだろう。

田漢は単行本を出すに当たって訳文に手を入れたと述べていた。上の例を見るかぎり小規模だ。コンマ符号を追加し「不過」を「也不過」にしたくらいのもの。

【ロルフ】 this most excellent canopy, the air[,] look you, this brave o'[v]erhanging firmament, this majestic roof fretted with golden fire, — why, it appears no other thing to me than a foul and pestilent congregation of vapours.

【戸沢】此の美しい青天井、此の 대기、此大空、此の金色の星を象眼にしたる大屋根も、たゞ忌まはしき毒瓦斯の、簇れる處とより外思はれぬ程、

【坪内】此空といふ世に美しい天蓋も、あれ、あの壯麗の穹窿も、燃ゆる黄金を鏤めたる雄大無双の碧落も……はて、我目には、只もう汚い穢らしい毒瓦斯の漲る場所とばかり見ゆるわい！

【田漢 1】 高空這個極優美的天蓋，你看，這個糾糾高懸的蒼穹，這個鏤着黄金之火の，雄大無边的碧落，——甚麼在我的心目中間不過一團汚穢的毒氣。

【田漢 2】 高空這個極優美的天蓋，你看，這個朗朗高懸的蒼穹，這個鏤着黄金之火の，雄大無边的碧落，——甚麼，在我的心目中間也不過一團汚穢的毒氣。

英文の the air[,] は、カッコ内に示したコン

マを田漢が打ち忘れたことを意味する。誤植だろう。ついでにいう。『田漢全集』第19巻172頁では不足を補い訂正している。初出雑誌のままではない。本来は注釈をつける箇所だ。中国で実行している本文引用の基準が日本で普通に考える全集本とは違う。

もうひとつ、原文の o'erhanging を田漢は overhanging に書き換えた。莎劇の初期版本^{*22}では orehanging または ore-hanging となっている箇所だ。グローブ、ロルフ、ダウデンともに o'erhanging としている。書きかえは田漢独自の判断であるらしい。

原文には符号「—」がある。戸沢は底本としたダウデンにそれが施されていないため当然のように無視した。坪内と田漢は符号の種類は違うが存在しているそのままを反映させている。ただし坪内が「見ゆるわい！」と感嘆符を使用した箇所は、ロルフに「！」はない。田漢はこの符号について坪内を採用しなかった。

坪内と田漢の共通する単語をあげる。「天蓋」「雄大」「碧落」「汚い穢らしい [汚穢]」である。

田漢はここでも初出の「不過」を単行本で「也不過」にしている。コンマ符号を加えて細かい手入れだといえることができる。

【ロルフ】 What a piece of work is man ! how noble in reason ! how infinite [in] faculty ! in form and moving how express and admirable ! in action how like an angel ! in apprehension how like a g[G]od ! the beauty of the world ! the paragon of animals !

【戸沢】 又人間とは何たる造化の妙工、高き理性、無限の能力、形態美しく、挙動正しく、行状は天使の如く智慧は神の如し、げに世界の花、動物の鑑とは人間の事、

【坪内】 人間は、ま何たる造化の妙工ぢや！ 理智には秀で、能力には限がない！ 風姿といひ、挙動といひ、いみじうもあり、ふさはしう

もあり！ 行為は天使の如く、智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも万霊の長とも思ふ此人間！

【田漢 1】人類這個東西是怎麼一個造化的妙工！理智怎樣的高！能力怎樣的広！風姿動作怎樣的特別而可誇！行為怎樣的像一個天使！智慧怎樣的像一個神明！真個是世界的花！万物の靈長！

【田漢 2】人類這個東西是怎麼一個造化的妙工！理智怎樣的高！能力怎樣的広！風姿動作怎樣的特別而可誇！行為怎樣的像一個天使！智慧怎樣的像一個神明！真個是世界的花！万物の靈長！

原文は [in] faculty ! と in がある。田漢は写し忘れた。また、g[G]od ! と g の小文字が原文だ。しかし、田漢は大文字にする。誤記なのか、常識に従って直したのかは不明。

原文を見れば「！」を多用していることがわかる。坪内は「行為は天使の如く」のあとには「！」を置いていない。また、「世界の華」でとどめず後ろの文章につづけた。そのため「！」を省略した。しかし、田漢は原文にあるがまま「！」を使用する。英文に忠実であることが理解できる。これを見ても田漢が漢訳したとき莎劇そのものを底本にしていなかったという説明は成立しない。

坪内は「智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも万霊の長とも思ふ此人間！」として原文にはない「此人間」を挿入した。田漢はそれについては坪内日訳を採用しなかった。

それでも坪内と田漢の語彙は一致するものが多い。「造化」「妙工」「理智」「能力」「風姿」「行為」「天使」「智慧」などだ。

比較する例として梁実秋と朱生豪の漢訳を示す。それらの訳文と対照するのは理由がある。坪内日訳とは関係のない梁実秋、朱生豪の用語を見るためだ。田漢とはどれくらい異なるかを知りたい。

【梁実秋】人是何等巧妙的一件天工！理性何等的高貴！智能何等的広大！儀容举止是何等的匀称可愛！行動是多麼像天使！悟性是多麼像神明！真是世界之美，万物之靈！ 111頁

【朱生豪】人類是一件多麼了不得的傑作！多麼高貴的理性！多麼偉大的力量！多麼優美的儀表！多麼文雅的舉動！在行為上多麼像一個天使！在智慧上多麼像一個天神！宇宙的精華！万物の靈長！ 49頁*23

田漢／梁実秋／朱生豪の順に単語を対比する。

造化的妙工／巧妙的一件天工／了不得的傑作、理智／理性／理性、能力／智能／力量、風姿／儀容／儀表、行為／举止／舉動、天使／天使／天使、智慧／悟性／智慧

見れば、田漢と朱生豪が一致するのは「天使」と「智慧」くらいだ。田漢の漢訳用語が坪内日訳にかなり近いことがあらためて理解できる。

【ロルフ】And yet, [to me,] what is this quintessence of dn[u]st?

【戸沢】去りながら今の此身には此人間てふ土の精も果して何、

【坪内】その人間が、予に取つては、只の塵埃ぢや。

【田漢 1】但是在我看来，這是一些甚麼灰塵的精髓？

【田漢 2】但是在我看来，這是一些甚麼灰塵的精髓？

英語の1文に2ヵ所も誤植がある。どうしてそうなったのか。印刷段階での事故か、田漢の書き間違いか、別の理由があるのかは不明。

そもそも“*And yet, [to me]*”の箇所には *to me* がなければ、それに相当する田漢漢訳の「在我看来」が宙に浮いてしまう。『田漢全集』第19巻(172頁)では注釈もつけず本来の正しい語句に訂正している。適切な処理だとは思わ

ない。

該文の前では人間礼讃だった。最後の1行においてその人間そのものを突き放す。塵からできた人間の真髓、精華、本質だといふのだから塵に回帰してしまう。塵としての人間が何だといふのか、という反語である。ロルフにある「？」を田漢も使用し、坪内にはならなかった。

雑誌初出時に第2幕第2場の漢訳を提出している。これは田漢がすでに全体の漢訳を終了していたことを示す。『田漢在日本』(441頁)が漢訳完成を1921年4月16日とするのは、雑誌初出「訳叙」末尾にそう記録しているからだろう。

四

【注】

11) 中国人の研究論文をいくつか。網羅しているわけではない。

○周兆祥『漢訳《哈姆雷特》研究』香港・中文大学出版社1981 香港中文大学中国文化研究所比較文学与翻訳中心専刊1

6頁「最初正式把莎劇全齣訳成中文劇本形式的是田漢，他用白話文翻《哈孟雷特[德]》，發表在1921年的《少年中国》雜誌上，1922年由上海中華書局出版，題為「莎翁傑作集」

355頁「田漢1922年出版《哈孟雷特》，成為把莎劇全齣訳成白話劇的第一人」

○戈宝權「莎士比亚作品在中国」中国莎士比亚研究会編『莎士比亚研究』創刊号 1983.3
337頁「莎士比亚的戲劇作品，直到1919年“五四”運動以後，方被用白話文和完整的劇本形式介紹過來。首先是田漢在1921年訳了《哈孟雷特[德]》，發表在当年出版的《少年中国》雜誌上，1922年作為《莎翁傑作集》第一種由中華書局出版」

○孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8

12-13頁「1921年他在《少年中国》2卷12期上發表了《哈孟雷特[德]》，第二年冬天由中華書局作為《莎翁傑作集》第1種出版，這是中国文壇上第

一次用劇本形式以白話訳的莎氏的压卷之作」。100頁にもほぼ同文がある。459頁にもあることは本稿で前述した。

○李偉民『中国莎士比亚批評史』北京・中国戯劇出版社2006.6

15頁「1921年和1924年，田漢用現代漢語訳了全本的《哈孟雷特[德]》和《羅蜜欧与朱麗葉》」注：全本『哈孟雷特』の刊行は1922年。1921年は一部分のみを發表。李偉民の間違ひ。

英語論文の例

○彭鏡禧 CHING-HSI PERNG “Chinese *Hamlets*: A Centenary Riview”, *Shakespeare: Authenticity and Adaptation*, De Montfort University, Leicester, UK, 2000.9.7-9 電字版

In 1921, Tien Han published *Ha-meng-lei-te*, his translation of *Hamlet* in spoken Chinese (Chou 6, Meng 12). It marks China's first attempt at rendering a Shakespearean play in full. p.7

1921年は雑誌に掲載したもの。題名に1922年単行本の『哈孟雷特』を重ねるのは正確ではない。

○孫艶娜『莎士比亚在中国 SHAKESPEARE IN CHINA』英文 開封・河南大学出版社2010.9 英語博士文庫
注に引用するのみ。注番号は省略。

In 1921 Tian Han (1898-1968), a playwright and translator, ambitiously attempted to translate ten plays of Shakespeare within three or four years—in fact, he did the first complete Chinese translation of Shakespeare, that of *Hamlet*, which was published by the China Publishing House in 1922, and afterwards of *Romeo and Juliet* in 1924. He was the first to translate a complete Shakespeare play in its original dramatic form into modern Chinese. p.20

12) 劉瑞「日本訳莎活動影響下の《哈孟雷特》翻譯——從田漢訳莎的日文転訳之爭談起」『東方翻譯』2016年第2期(総第40期)刊年不記

13) 李春江『訳不尽の莎士比亚：莎劇漢訳研究』天津社会科学院出版社2010.11

14) 劉瑞の記述は以下のとおり。「莎士比亚·哈姆雷特(中英对照)[M]。梁爽秋，訳。北京：中国廣播電視出版社，2001」私が見ているのは次のとお

り。梁実秋訳『四大悲劇(莎士比亚叢書・中英対照)』北京・中国広播電視出版社、台湾・遠東図書公司2002.1。「例言」によると底本は牛津本、W. J. Craig 編とある。調べると1914年刊行という。劉瑞が該書の刊年を2001とするのは奥付にある図書在版編目(CIP)データの表示2001.7によっている。実際の刊年と異なる理由は不明。梁実秋の漢訳は1936年商務印書館から刊行された。梁実秋訳『丹麦王子ハムレット之悲劇』上海・商務印書館1936.7/影印本。英文未収録。表紙に「莎士比亚的」とある。「中英対照」本は後のものと思う。また次もある。梁実秋訳『ハムレット(中英対照)』台湾・遠東図書股份有限公司2017.1四版 莎士比亚叢書32。

- 15) 坪内逍遙(雄蔵)『シェークスピア研究彙』早稲田大学出版部1928.12.3。71頁/新修シェークスピア全集第40巻、中央公論社1935.5.15。92-93頁
- 16) 華亭雷瑠編輯『各国名人事略』硯耕山莊 光緒三十一(1905)年正月再版 実藤文庫
- 17) 王国維「莎士比伝」『教育世界』第159号 1907.10初出未見/姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5
- 18) 東潤(朱世濤)「莎氏楽府談」1-4『太平洋』第1巻第5-9号 1917.7.15-1918.1
- 19) 別訳をひとつ。「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや。To be, or not to be: that is the question:」733頁。シェークスピア著、坪内逍遙訳『ザ・シェークスピア(愛蔵版)』第三書館2002.8.15
- 20) 梁実秋訳『丹麦王子ハムレット之悲劇』上海・商務印書館1936.7/影印本。英文未収録。表紙に「莎士比亚的」とある。漢訳して「活着、還是不活着、——這是問題;」54頁
- 21) 坪内雄蔵「近松対シェークスピア対イブセン」『劇と文学』富山房1911.10.23
- 22) Q1、Q2、F1。ウェブサイト Hamlet webpage を参照した。
- 23) 朱生豪訳、呉興華校「ハムレット」『莎士比亚全集』9 北京・人民文学出版社1978.4

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

『比律賓志士独立伝』の底本3完

沢本郁馬

その後の経過は次のとおり。滔天がボンセの承諾を得て保管されていた残りの武器を孫文に流用しようとしたところ中村がすでに無断で売り払っていたということが明らかになった。滔天はそう書き残している。簡単にいえば、そういう経緯である。

少し時間をもどして武器払い下げの運動について滔天の証言を紹介する。

『三十三年之夢』227頁 ポンセ君

すでにして背山は、その運動に着手せり。しかして菲島委員ボンセ君は、全権を孫君に依托して敢えて干渉せず、背山と孫君の間には余と南万里とありて、相互の伝信機となりたり。すでにして警察の目は、更に余らの挙動を注視するに至れり。

背山とは中村弥六のこと。孫は孫文(逸仙)。南万里とは平山周を指す。

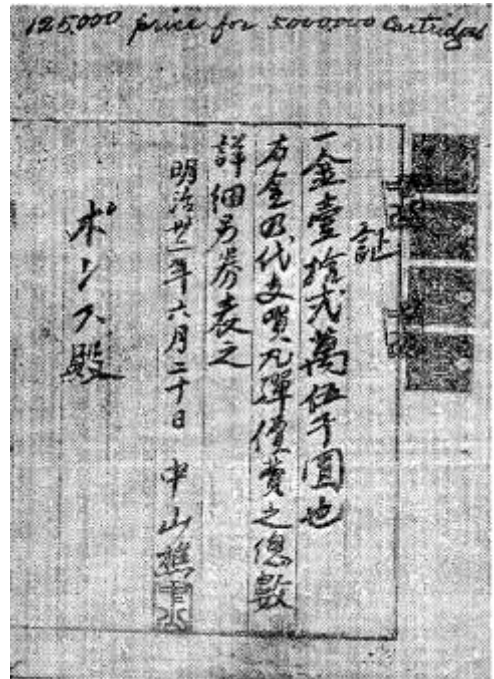
前述のように弾薬を搭載した布引丸は寧波沖、あるいは上海沖で暴風雨のために沈没してしまった。

西郷内務大臣より青木外務大臣にあてた1900年2月6日付「布引丸一件調査ノ結果回答ノ件」がその状況を報告している⁹⁾。

客年十一月廿一日送第二八三号ヲ以テ汽船布引丸カ比律賓叛徒ニ供給ノ目的ヲ以テ彈藥其ノ他軍需品ヲ搭載シ居リタルトノ風説ニ関シ在本邦米国公使ヨリ申越候件ニ付事実ノ有無取調方御照会之趣了承。右ハ篤ト取調候處汽船布引丸ハ東京市住中村弥六ノ所有ニシテ明治三十二年七月十三日船長石川伝外船員三十四人乗組神戸港ヲ拔錨シ門司港ニ於テ航海用石炭凡ソ五百噸ト外ニ彈藥凡ソ三百噸ヲ積ミ込ミ便乗客トシテ日本人某三名麻尼刺人一名乗リ込ミ七月十七日同港拔錨長崎港ニ寄港シ長崎税関ニ仕向港上海トシテ届出テ同十九日出帆シ航海中同廿一日午前上海沖ニテ海難ニ罹リ沈没シ船長以下十九人ハ今ニ行先不明ニシテ他ノ船員ハ救助セラレタリ。然ルニ右彈藥ハ東京火藥商大倉米吉カ横浜在留独逸国「シー、ウキンベルゲル」商会ニ売渡シタルモノヲ門司港ニ於テ布引丸ニ積ミ込ミタルモノニ有之。而シテ比律賓ニ輸送スルノ目的ナリシ事実ハ分明不致。且仮ニ比律賓ニ輸送スルノ目的ナリシトスルモ現行刑法ニハ右ノ如キ事実ヲ処分スルノ明文無之候ニ付右様御了承相成度此段及御回答候也

上記に關係してボンセお清の証言がある*10。名前のおおりにボンセの妻だ。インタビューした磯海国敏は次のように書いている。

我がボンセ氏の手許には明治三十二年六月二十日附を以て謎の人物『中山樵』の名を以てマリアノ・ボンセに手交した彈丸五百万発の代金十二万五千円の受取証が保存されて居り、布引丸が同年七月十五日前後に門司の港で遠洋航海に就く準備として四百七十七噸の石炭を門司の平岡商店より買った時の代金二千二百廿三円廿二銭の請求書が残されてゐた。



中山樵(孫文)のボンセ(ボンセ)あて受取証 神戸大学ネットより引用

中山樵はいうまでもなく孫文のこと。外交文書の内容とボンセお清の所有する資料を照らし合わせる。布引丸に積み込んだ彈藥(銃器は含まれていないらしい)は日本人商人がドイツ商会に売り渡した。それをボンセの代理人になった孫文が中山樵の名前を使用して購入したことになる。だからボンセの手元に孫文が支払いのためあらかじめ受け取った資金の「受取証」が保管されている。

中村弥六が彈藥購入に關係して私腹を肥やした。そういう滔天の指摘がある。

『三十三年之夢』324-325頁 本君(ボンくん) [266頁「本君」を「背山」に誤る] すなわち知る、この間また背山私するところのもの甚だ少なからざるを。しかして、未だその私書偽造の奸策に出でたるを知らざるなし。翁すなわち本君/ボンくん/および先生の実状を述べて小倉の同情を求め、強いて三万金を出ださんことを請う。

小倉は小倉商店、すなわち大倉喜八郎を指すというのが普通の解釈らしい。ただ、外交文書に「東京火薬商大倉米吉」の名前がある(888頁上)。こちらは大倉だから少しまぎらわしい。

最後は滔天による総括である。あらかじめ説明する。ボンセの依頼により調達した弾薬は布引丸の沈没で失われた。これが文中に見える菲島(フィリピン)事件だ。残った武器を孫文に渡すつもりが、中村弥六によって転売されていたという経緯があった。こちらが惠州事件に関係している。

『三十三年之夢』352頁 本(ボン)君*11
[243頁は省略している]

回顧すれば半生一夢、すべてこれ失敗の夢迹なり。夢迹追懐しきたりて痛恨の情に堪えざるもの、実に菲島事件と惠州事件の二となす。しかして菲島の事、彼の如くにして破れ、惠州の事また此の如くにして破る。思うてここに至れば、余は実に背山の肉を食ひ、血を啜るもなおかつ嫌らざらんとす。ああ豈に余のみならんや、志を同じゅうし道をともにしたるものは、みな然らん。いわんや孫君、本/ボン/君においてをや。しかれども翻って考うれば、皆これ自己不明不徳のいたすところ、罪を背山一人に帰してこそを責むるは、道にあらざるなり。しかし、彼を責むるはみずから責むるに如かず、人に求むるはみずから求むるに如かず。ああ、われそれ終生山門の人とならんか。

上に見える「本(ボン)君」はボンセを指しているのが重要だ。ボンセという名前から宮崎は彼のことを「本(ボン)君」と書いた。

漢訳者吳超は、滔天と交友があったのかも知れない。あるいは滔天の著作を読んでいた可能性もある。ボンセのボンに宮崎が使用した「本」を当てた。すなわち「本西(ボンセイ)」であ

る。ここは吳超の工夫だと考えたい。

では、「崇昭」はどうか。こちらは簡単には解決できない。

漢訳者吳超はフィリピン人の名を翻訳して2文字に簡略化する傾向を有している。すこし上述の名前の漢訳から抜き出す。

ガリカーノ Galicano (愷古)、イシドーロ Isidoro (奚路)、フェリーペ Felipe (華配)、マルセリーノ Marcelino (苗待)、アントニオ Antonio (都元)、グレゴリーオ Gregorio (浩託)、パンタレオン Pantaleon (平台) というぐあいだ。

原音と漢訳は一致しているようでないようでもあり断定できない。グレゴリーオ Gregorio (浩託)などは、北京語音とは一致しないように思える。吳超の使用する地方音が影響しているかもしれない。

それにしても、マリアノ Mariano が崇昭になるだろうか。

私はここでひとつの仮説を提出したい。崇昭はボンセが日本で使用した別名だと考える。読みは「たかあき」あるいは「あきら」ではなかろうか。

そう考える根拠は、ボンセの妻が日本人だからだ。

以下は前出『台湾日日新報』のインタビュー記事による。

日本人宇田川キヨ(清)、東京神田生まれ横浜育ち。父は宇田川鶴次郎。横浜の同家に寄寓したのが仮名サン・ペーレのボンセだった。フィリピンのスペイン官憲の目を逃れて日本に亡命中である。そこには「之亦日本に亡命中の中山孫逸仙氏も盛んに出入し」ていた。スペイン公使館に要求されて刑事による監視があった。張り込みの刑事が仲人になりボンセ32歳、お清18歳のふたりは結婚した。

ボンセお清の証言。

「ボンセは日本に長く在住して居りましたし日本好きでしたので(日本語が)大層上手でし

たから不便はありませんでした、衣服も妙高寺山の実家に居た頃は日本のキモノ許り著てみましたし日本食は何でも好んで食べました」

日本語を話し和服を着て日本食を好んだポンセは、写真で見るかぎり日本人と見えないこともない。その彼が崇昭という別名を持っていたとしても不思議ではなかろう。また、それを漢訳に使用した呉超は、そこまで知っていたことになる。

7 ポンセの肖像

ポンセの肖像をいくつか紹介する。

a スペイン・マドリッド雑誌『連帯』時代



『南洋之風雲』所収 左よりリサール、ピラール、椅子に座ったポンセ。

宮本の説明によると雑誌『連帯』の編集長として、中央が社長（ピラール）と左に専任編集員（リサール）である。3頁の説明は以下のとおり。「該雑誌（『連帯責任 La Solidaridad』注：一般には『連帯』と称する）の社長はマルセーロ、イラーリオ、デルピラール氏にしてホセー、リザール及アレートニオ、ルーナの二氏専任編輯員たり。是等諸氏は皆比律賓群島の政治界に於て名声赫々たる者にしてポンセ氏が莫

逆の友たり」

b 年代不明



『あぎなるど』166頁

山田美妙『(比律賓独立戦話) あぎなるど』後編244頁の次（内外出版協会1902.9.30/12.12再版/中公文庫1990.8.1）に収録。「香港に着したるアギナルドの一行」と題した集合写真がある。その右肩にポンセのみ枠中に示される。

また、同書に収録された「比律賓の亡命志士その一人 マリアアノ、ポンセ氏」という文章は、『南洋之風雲』所収の「ドン、マリアアノ、ポンセ」と基本的に同じである。

c ポンセ（和服）と孫文



1899年 孫文と 横浜ポンセ宅にて (Pichoriサイトより)

同じ写真について別の説明がある。1899年ではなく1901年1月とする。横浜でフィリピン独立軍代表ポンセ(彭西)と。これはネットの説明。

ポンセお清の証言をくり返す。「ポンセは日本に長く在住して居りましたし日本好きでしたので(日本語が)大層上手でしたから不便はありませんでした、衣服も妙高寺山の実家に居た頃は日本のキモノ許り著てみましたし日本食は何でも好んで食べました」

d 孫文、アメリカ人記者とポンセ



1901年 孫文が日本でLook誌の記者に会う(ネットから引用)

写真の説明には惠州起義(注:1900年)の状況を聞いているとある。右から孫中山、リンチ(G. Lynch 漢訳:林奇)、後ろ右にポンセ(Mario Ponce 漢訳:彭西)など。典拠は上海孫中山故居紀念館編『孫中山——紀念孫中山先生誕辰130週年』(上海人民出版社1996.10。未見)だ。

疑問がひとつある。どう見ても写真cの孫文とポンセの服装と一致している。背景も同じだ。すると写真cは写真dと同じく1901年1月に撮影したものだろう。

8 来日以前のマリアノ・ポンセ

以下は「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」(『南洋之風雲』1-5頁所収)による。固有名詞

は原文のまま。

1867年3月24日(一説に1863.3.23)、フィリピン、ルソン島ブラカーン州バリワッグに生まれる。十九歳の時、著作Folk Lore Bulakeno(ブラカーン俗話)を書く。1886年、スペインのバルセロナ大学に留学、のちマドリッド大学へ遊学する。スペインによるフィリピン群島への抑圧と圧制を著述した『比律賓史考 Efemerides Filipinas』がある。1889年、スペイン・マドリッド在住のフィリピン志士と『連帯責任 La Solidaridad』を発行し編集長をつとめる。1896年、スペイン政府より発行禁止を命令される。「社長はマルセーロ、イラーリオ、デルピラール氏にしてホセー、リザール及アレトーニオ、ルーナの二氏専任編輯員たり」(3頁)。1894年、「西班牙時代以前に於ける比律賓群島文明史考究の資料」という論文を書く。1896年8月、フィリピン群島の革命戦争起こる。ポンセはスペインよりフランスに逃れ、同年10月香港に到着、亡命者たちと「比律賓群島革命期成会 gunta Revolucionaris de Filipinas」を組織した。1897年12月、フィリピン人とスペイン人とのあいだにビアック、ナ、バトー媾和条約が締結され革命の統領アギナルド將軍は部下の将校40余名を引率して香港に渡航、在香港の志士と比律賓委員会(Comit Filipino)を組織しポンセを書記長にする。その後、アメリカ、スペイン戦争によるフィリピン独立戦争が再燃し、1898年8月、ポンセはフィリピン政府の代表者として日本に派遣された。

9 漢訳に対する疑問

ポンセが該書を書いた目的は、フィリピンが直面している状況を日本人に理解してもらいたかったからだ。第1章「緒言」に「余は真心余の敬愛する日本人に望む、請ふ先づ余の本国の政治的社会的状態の真相を知悉せられんことを、而して之を知らんとするに当り決して故意

に事実を抹殺し正当の判断を失はしめんとするを目的とせる書籍に據るなからんことを(4頁)とある。

そういう著者の希望を無視して漢訳がその本体そのものを削除したのはなぜであろうか。附録の「志士列伝」のみを取りあげて翻訳した理由が不明である。推測すれば漢訳者の呉超は、ボンセを本西と訳すなど彼との面識を有していたらしい。だからこそ、不可解さを感じるのだ。

以上のような疑問は残る。該書の全訳は、『飛獵濱(菲利濱)独立戦史』『南洋風雲』へと続く。 ㊦

【注】

- 9) 「事項三一 布引丸一件 五六八」前出『日本外交文書』887-888頁
- 10) マニラ本社特置員・磯海国敏「日支比間の国際秘話／ボンセお清物語／比島革命政府の重任を帯びて来朝／当年の志士ボンセ博士」『台湾日日新報(新聞)』1934.3.4-9 神戸大学経済経営研究所・新聞記事文庫・政治(48-131)電字版。磯海国敏がフィリピンでスペイン風の邸宅に子どもたちと住むボンセお清にインタビューした記事。同行したのは、万里野平太。マニラ日本総領事館井沢副領事の筆名(『国民新聞』1933.5.4 神戸大学経済経営研究所・新聞記事文庫・東南アジア諸国(7-064))
- 11) 国立国会図書館デジタルコレクションではルビは「ほんくん」。

【参考文献】

宮崎滔天『支那革命軍談』法政大学出版局1967.9.10
 木村 毅『布引丸——フィリピン独立軍秘話』春陽堂1944初版未見／恒文社1981.9.30
 威志芬「孫中山と菲律賓独立戦争——中菲友誼史上の一頁」『近代史研究』1982年第4期 1982.10 電字版
 波多野勝「フィリピン独立運動と日本の対応」『アジア研究』第34巻第4号 1988 電字版
 波多野勝『満蒙独立運動』PHP新書144 2001.3.1

俞 辛焯『孫文の革命運動と日本』六興出版 1989.4.10 「東アジアのなかの日本歴史」9
 早瀬晋三「フィリピンをめぐる明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」』『重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて』27 1996.11.30 電字版
 小坂文乃『革命をプロデュースした日本人』講談社 2009.11.23



李 欧梵○(『從「身体」到「世界」：晚清小説的新概念地図』)序言 顔健富『從「身体」到「世界」：晚清小説的新概念地図』台湾・国立台湾大学出版中心2014.12
 顔 健富○『晚清小説的新概念地図』北京聯合出版公司2018.4
 李 欧梵○(『晚清小説的新概念地図』)序言 顔健富『晚清小説的新概念地図』北京聯合出版公司2018.4

姚文賢、王衛英主編『百年中国科幻小説精品賞析』第1冊

北京・科学普及出版社2017.5
 (『百年中国科幻小説精品賞析』)序……王康友
 (『百年中国科幻小説精品賞析』)導言……王晋康
 晚清至中華人民共和國成立前的科幻小説創作綜述(1904-1949)……任冬梅
 中国科幻星際旅行的最初夢想——論荒江釣叟的《月球殖民地小説》及其時空觀……任冬梅
 “虛空界之科学”——徐念慈与《新法螺先生譚》……任冬梅
 “賈宝玉坐潜水艇”——《新石頭記》賞析……任冬梅
 附録「中国長篇科幻小説輯録」……姚海軍

『明清小説研究』2018年第1期

(総第127期)2018.1.15
 晚清王斧小説考……牛志威
 歴史与文学的錯位：晚清小説《九命奇冤》本事考論……周宝東
 論《桃源続記》及其文化内涵……吳建生

自爆する日中の研究者たち 1

——清末小説と林訳をめぐって

樽 本 照 雄

本稿のような題名の文章は、日本において今まで見たことがないと思う。少なくとも清末小説研究の分野についてはそうだ。しかし、私は以前から論文の主題に応じて部分的に詳しく述べている。今回その部分的なものを遠慮せずにまとめた。そうするとこの表題になったという次第。

本稿では研究における事実の認定に問題を限定している。誤解のないように願います。また、くり返す部分があるのはご了承ください。

研究者の論文内容について主として負の部分を集めた。それぞれに根拠がある。とはいえ読者によっては穏やかでないと感じられるかもしれない。そういう部類のものだ。ご注意。事実を直視することができない人にはお勧めしない。

清朝末期小説研究の分野を対象とする。ただし林紘との関連で中華民国も含む。日本ではもとから研究者も少なく寒々とした研究分野だ。興味を示す人は多くない。中国学界に遠慮しながら付度して書かないというよりも、単に誰も知らないから説明がないだけだろう。

「自爆」とは、たとえ(比喩)である。肉体ではなく研究精神について言っている。研究者として自ら進んで死亡することだ。まさか、と思われることが実在する。事実の認定を誤った

ために自らが爆発する結果になった。個人の認識が誘発したのだからしかたがない。だがそれだけでは収まらないばあいがある。事実の誤認は周囲に影響を及ぼす。影響力を持つ研究者だとその程度が深い。

具体的にいえばつぎのようなことを指す。証拠がないのに立論断定する。根拠もなく批判する。あるがままの事実を認めず曲解する。捏造する。妄想する。先行文献を引用するだけですませる。しかも引用だとは書かない。新しい発見がない。証拠があるにもかかわらず冤罪であることを否定する。

その方法をひとこと表現するならば、先に結論を定めていることだ。あとからそれに合致する資料を提出する。持説に不都合な事実は無視する。問題が発生するのは当たり前である。

事実にもとづかないその結論は、研究を装った政治的作文になる。説明しておくが「無産階級文化大革命」時期のことをいっているのではない。「中国の」という修飾語をつけないのは「無産階級文化大革命」という名称は中国でしか使用されなかったからだ。

それらの文章は学術研究とは基本的に関係がない。爆死といっても肉体ではなく精神的なものだから本人に自覚はないはず。あなたは研究者としてすでに死んでいる、と他人から指摘されても理解できないだろう。まあ、本稿には故人が含まれてはいる。生きていても同じだ。

「日中」とは、日本と中国である。それ以外は視野に入れていない。

「研究者たち」とは複数の人が存在していることをいう。

自爆にいたるまでの過程を見れば、個々の研究者で異なる。大きくふたつに分けることができる。

自ら進んで立論しているばあいはこれを積極的自爆という。本人が意識しているかどうかは別問題だ。それとは違って他人の結論を鵜呑みにし追従したために死亡してしまう。これを消

極的自爆と名づける。主題によっては意図をもって提起する人と後から追隨する人が入り混じることもある。両者ともに事実誤認の結果が精神的爆死であるところに違いはない。

大規模かつ広範囲に爆発した例をひとつあげる。1910年代に開始された林紘批判である。今から100年前のことだ。北京大学教授たちが主張をはじめ、後の研究者全員が一致してそれに賛同した。林紘批判とほぼ重なる。五四直前に政治運動としてはじまった。

外国語を理解しない林紘は、協力者が原書を翻訳するのを聞きながら文言で筆写した。現在から見れば奇妙に感じられるかもしれない。だが、中国には昔からある翻訳方法のひとつだ。奇異に思うほうが奇異なのである。

それにしても林紘がいくつかの戯曲を小説に書き換えたというのはどうか。現存する林紘そのものを見れば明白にその事実がある。シェイクスピア劇(莎劇)が小説になっている。イブセン劇も小説のかたちで出ている。

文学革命派の人たちはそれを林紘批判の根拠にした。林紘が「戯曲を小説にかえて翻訳した」のは「戯曲と小説の区別がつかない」からだと言って痛罵した。「区別がつかない」が鍵語だ。そういうレッテルを貼って(帽子をかぶせるも同じ)21世紀のはじめまで80年以上が経過する。その間、林紘についての批判的判断評価が変化したことはない。

レッテルという表記からして林紘を貶めるのが目的であり基本だ。内容がなく事実に基づかないレッテルであった。しかし世界の研究者はそれを信じて疑わず林紘批判論文の再生産をくり返した。名前だけで知っている著名な学者、指導教授、先輩、同輩、後輩の研究者の全員が、林紘は「戯曲と小説の区別がつかない」、文芸の基礎知識もない、「戯曲を小説にかえて翻訳した」と書いて非難している。誰も疑問に思わなかった。

林紘批判の正しさはすでに証明済みだ。動か

そうにも否定することのできない結論である。それを継承しただけ。くり返した多くの研究者はそういう気持ちなのだと思う。大きな欠陥があるとすれば、自分で検証しなかったことだ。

検証と簡単にいうが実行するのは困難だ。小説になっている林紘をどのように検証検討すればいいのか。莎劇そのものと比較対照しようにも、原作の戯曲が翻訳されて小説に変化しているから落差が大きい。かなりむづかしい。手掛かりはどこにもない。実際はあったのだが「区別がつかない」という思い込みがじゃまをして研究者たちは見逃した。不思議なことがあるものだ。

林紘批判について一応は自分で先行論文を調べて読んだらう。林紘に取り組む優秀な専門家が調査をしないで立論するはずがない。中国学界に事大して林紘を批判した人たちも含む。しかし、調べたところすべての論文は林紘批判一色であって異論がない。2007年当時はそのようだった。

各自の意見に少しの食い違いでもあれば、そこが研究を進めるための突破口になりうる。だが結論は見事なまでに完全一致している。林紘は「戯曲と小説の区別がつかない」から「戯曲を小説にかえて翻訳した」という結論だ。その逆も成り立つ。

結論が不動であれば新しい発見は生まれにくい。そういう状況では自分だけの意見を見つけて育成すること自体が困難になる。たとえ独自の見解を得たとしても従来の結論とかけ離れたものであれば、自分の方が間違っているのではないかと考える。それが普通の感覚だ。

中国においては現在でも林紘批判が学界の基本である。一部に見直しがあるのは事実だ。しかし、林紘の「区別がつかない論」については少しのブレもなく一貫して非難が継続されている。最近ではわざと触れないばあいもある。いわば立入禁止区域あつかいだ。暗黙の了解らしくそれをいう研究者はいない。

学界の流れに逆らい異論を唱えたと中国では研究者としての命を失いかねない。安全を保障してくれるものはない。だからこそ「林紆を罵る快樂」に身をゆだねる。例外のない圧倒的多数と同じことを主張するのは精神的に安心できる。いうまでもないことだ。連帯感があるだろう。研究者全員は80年以上も心の安寧を得ていたわけだ。それと同じ時間を共有して、中国にいる林紆の関係者は深く重い苦痛を味わっていた(林紆の孫林大文は祖父の汚名返上名誉挽回のために尽力していた。2010年、海南島で遊泳中に死去されたという)。それに思い至る研究者はいないように見える。研究と政治は結びついている。現代中国社会の構造がそうになっているのだ。例をあげる。1987年、劉鉄雲學術討論会が行なわれた。表面上は単なる学会のように見える。だが関係者がいうにはこれは「平反(誤った政治決定を破棄する。名誉回復)大会」だという。つまり、今後は劉鉄雲の関係者を政治的に迫害しないという宣言なのだった。それまでは生存する関係者を迫害していたという証拠だ。中国以外の場所にいる研究者は中国学界、あるいは中国社会の現実を見ることができないのだろうか。できたとしても文章にはしなかった。

身体的、思想的迫害とは無縁の、別の表現をすれば研究の自由があるはずと思われる場所ではどうだったか。2007年の時点で中国以外においても、私が見たかぎり林紆批判については記述が同一であった。

世界の研究者が林紆批判については一致した見解を示す。例外がないから結果として全員が自爆して死亡している。なぜならば林紆批判の根拠そのものが崩壊したからだ。林紆は戯曲を小説に書き直していない。林紆シェイクスピアと林紆イブセンには小説化された底本があった。もともと小説なのだから翻訳して小説になるのは当然だ。林紆批判は成立しない。現在それが明らかになっている(後述)。

林紆研究をしている人にしてみれば周囲の研究者たちと同じ立ち位置にいるつもり。全員一致なのだ。ゆえに自分が爆死しているという自覚がない。死亡を免れているのは、自分の論文で林紆批判に言及しなかった人のみだ。

本稿でとりあげる研究者の自爆は林紆批判に限らないとあらかじめ言うておく。

具体的な名前を最初に示す。中国では阿英、魏紹昌、汪家溶、陳大康そして日本の瀬戸博士である。中国の錚々たる研究者と同列に日本の研究者がいるのに違和感を持たれるかもしれない。いや、十分な「業績」を積み上げていて堂々と対等かそれ以上である。事実が明らかになった今でも林紆冤罪事件を否定し林紆を漫罵しつづけている日本の研究者だ。

1 阿英のばあい

阿英(別の筆名は銭杏邨、1900-77)は清末文学研究の先駆者、功労者、貢献者、蔵書家であり学界の権威である。1930年代から清末文学の分野に注目した。尊敬すべき研究者のひとりであることはいうまでもない。

清末関係に限ってもその業績は膨大なものだ。『晚清小説史』(商務印書館1937/修正版 作家出版社1955)と『晚清戯曲小説目』(上海文藝聯合出版社1954/増補版 古典文学出版社1957。阿英目録と称する)が有名である。清末小説研究の基礎文献といつていい。

以前は依拠できる資料といえば阿英の著書、目録くらいしかなかった。阿英目録で書籍の存在を確認するのが手順である。長年にわたって使用して役に立っていた。

ほかに、散逸した作品を収録する叢書を編集した。重要な成果だ。1940-60年代の「中国近代反侵略文学集」シリーズである。

『中法戦争文学集』、『中日戦争文学集』(後に改題して『甲午中日戦争文学集』)、『鴉片戦争文学集』2冊、『庚子事変文学集』2冊、『反

『美華工禁約文学集』など。また、1960年代に陸續と出版された「晚清文学叢鈔」シリーズも貴重な作品集、資料集だ。『小説戯曲研究巻』、『説唱文学巻』2冊、『小説』4巻8冊、『域外文学訳文巻』4冊、『俄羅斯文学訳文巻』2冊、『伝奇雑劇巻』2冊となっている。

これらを見ただけでも清末文学研究に対する阿英の貢献はまことに大きいことがわかる。誰でもが認めるだろう。功績が巨大であるだけにほかの研究者に与える影響も大きく広範囲にわたる。阿英は多数の書籍を所蔵していた。実物を根拠にしているからこそ彼が論文のなかで指摘する事柄は無条件に信頼されている。

阿英目録

完備していると思った阿英目録だ。ところが長く利用しているうちにいくつかの記述に不備があることがわかる。ほかの研究者が具体的に示していないから不思議に感じたことだ。

清末のある著名な作品1冊の発行月について阿英は誤記した。阿英目録は基本的に単行本の発行年だけを示す。月までは記述しない。そういう編集方針だ。ところがその作品に限っては新暦旧暦混用して月までを記入した。その月表示の1ヵ所が間違っている。まことに小さな問題だ。ところがこの小問題によって阿英の存在が巨大であることが逆に証明されることになった。

誤りはわずかに1文字である。「一九〇六年十一月」とすべきところを「一九〇六年十二月」と間違えて記述している(阿英目録66頁)。私は書物の実物を見て阿英の誤記に気づいた。しかし中国の研究者は、まさか阿英目録に誤りがあるとは思わなかったらしい。阿英の記述だからと全面的に信頼した。専門家でありながら自分で現物を確認せずに阿英の示した正しくない「十二月」を引用し続けたのが事実だ。

私が中国の雑誌に短文を投稿して阿英の誤りを指摘した。すると「阿英氏は間違っていない」

とある研究者は見当違いな反論をしてきた(竺慶麟「阿英先生没有錯」『読書』1998年第12期)。奇妙なことだ。実物の作品を見ずに阿英が犯した間違いのほうを信用している。私には理解できない反応だった。しかもそれを雑誌に掲載する編集者がいたのだ。

阿英に対する信頼度は、中国の研究者にとってはそれほどまでに大きい。竺慶麟は阿英に追随したという点で消極的自爆だ。しかし外国人による正しい指摘を拒否し間違った阿英を強く支持したから積極的自爆でもある。

著名な研究者である裴效維から手紙をもらった。その発行年月誤記に関してのものだ。確かに初版を見ていないがそのことと作品研究は関係がない、と書いてある。これにも少し驚いた。立論こそが重要であって書誌的な細部の間違いなどどうでもいい、というご意見である。専門家が清末小説の初出、初版を確認せずに論文を書く。それが中国学界では常識らしい。現在も誤る研究者は多い(後述)。

誤記誤植の類は避けようがない。また阿英目録に未収録の作品があることをことさら言う必要もない。書物に十分でない個所があるのは一般に普通のことだ。

阿英目録は当時の小説につけられた政治小説、愛情小説、偵探小説、科学小説などという角書を採取していない。商務印書館が刊行していた海外翻訳小説シリーズ「説部叢書」の表示がない。元版の第一集第一編などの詳細を採取項目にしない。詳細な刊行年月を示さない。翻訳作品については原作、原作者の注記説明はない。そこまで踏み込むことは目録の範囲を超えると考えたのかもしれない。単に調査不足の可能性もある。阿英目録以降に編集刊行された目録には、翻訳の原作などを注記しないことが主流になった。中国学界では、翻訳を中国文学ではないと軽視する傾向があったのが原因かとも思う。

そういう編集方針だと言われればそうなのだろう。「晚清小説目録例」で明示してあれば問

題ではなかった。それがないから意外に思い戸惑う。これらは瑕瑾であるにすぎない。読者はそれを理解して利用すればいいだけのことだ。

問題は別のところに存在する。

阿英が刊行時の政治状況を書き込んでいる箇所を見る。

『晚清小説史』の「跋」

刊行順に『晚清小説史』から説明する。

1937年に初版が出た。中華人民共和国成立後の1955年に修正版が刊行されたとき「跋」が巻末に加えられる。そこには次のような箇所がある(傍線省略。以下同じ)。

『晚清小説史』は私の20年前の旧作で、かつて上海商務印書館より発行された。該書はすでに絶版となっており各方面から時に需要があるが、原作品がすべて蒋介石匪賊によって強奪されつくしてしまい、すぐに書き換えることは容易ではない。

晚清小説史是我二十年前的旧作，曾由上海商務印書館印行。書早已絶版，而各方面時有需要，原著又都已為蔣匪劫毀，一時改作不易。

国内戦争時の敵を「蒋介石匪賊[蔣匪]」と表現した。阿英の意思である。

ところが香港影印本では「蒋介石匪賊によって[為蔣匪]」を削除する(1978年に公表。翌1979年に中野美代子も指摘した。386頁)。削除して文章の前後をつないだ。影印本だからできる巧妙な細工である。阿英本人とこの改変は直接の関係はない。出版社が行なった語句の削除は当時の香港における政治状況が影響しているのだろう。中国大陸で重印された娘婿呉泰昌校勘の北京・人民文学出版社本(1980/1991)、北京・東方出版社本(1996)は「為蔣匪」を残す。だが奇怪なことに、南京・鳳凰出版伝媒集団、江蘇文藝出版社本(2009)は

その3文字を削除する。「蔣匪」を原文のままに残すか削除するか、その時の台湾にかかわる政治状況の判断が動いていると感じる。

『晚清戯曲小説目』の「叙記」

『晚清小説目』を収録した『晚清戯曲小説目』には、1954年7月の日付をつけた「叙記」がある。ここに注目したい。それによると清末の戯曲と小説の目録は1930年代から準備を進めていたという。紙型まで作製したが出版にはいたらなかった。戦争で失われたかに見えたがようやく刊行にこぎつけたことを説明している。最後部分を引用する(下線筆者)。

ふたつの目録(注: 晚清戯曲録と晚清小説目)は最初に組版してから今回重版出版するに至るまでまたたく間にすでに十数年が経過した。このもつとも苦難に満ちた歲月において毛主席と党の指導、中国人民の共同する努力とソ連友邦の援助により、我が国は日本およびアメリカの侵略者を撃退したばかりか蒋介石匪賊を撃滅し、また中華人民共和国を建立して社会主義建設の段階まで発展し百年來人民が夢にも求めていた憲法を發布し民族はついに復興したのである。国を挙げて狂喜し自ら深く喜び祝うばかりか、百年來受け継いできた愛国の烈士、および清末愛国主義の小説戯曲と文学藝術の作者を慰めるに足るものであると考える。ひどく悲しく思うのは、戦前数十年の蔵書は交通困難のため戦争のはじめに延安へ運搬することができず、ついに日本の侵略者、蒋介石匪賊のために強奪され原稿は一部分が散逸した。亡児錢毅は不幸にして1947年春の解放戦争中に勇敢にも国に殉じ本書の出版を見ることができなかった。ああ! 本書を謹んでささげる。

溯自二目初排以至今茲重版出版，忽忽已歷十數年。在此最艱苦歲月之中，由於毛主席

席及党的領導，由於中国人民的共通努力以及蘇聯友邦的援助，我国不僅擊退日、美两国侵略者，擊垮蔣匪幫，且建立了中華人民共和国，發展至於社会主义建設段階，頒佈百年来人民所夢寐以求的憲法，民族終賴復興。不僅举国歡騰，深自慶幸，亦足以告慰百年来前仆後繼之愛國先烈，及晚清愛國主義之小説、戲曲及文学藝術作者矣。所痛心的，戰前数十年藏書，以交通困難，戰初無法運往延安，終為日寇、蔣匪劫毀，部分原稿亦因以散佚，亡兒錢毅，亦不幸於一九四七年春解放戰爭中英勇殉國，不及見此書之印成耳。嗚呼！謹再以此冊獻之。

毛沢東と中国共産党が出てくる。1926年、阿英は中国共産党に加入しているから不思議ではない（『阿英全集』附巻。404頁）。1949年より天津市文化局局長に就任し、1952年から華北文聯主席である。1954年、上記の文章を書いた後に華北文聯は解散し阿英は中国文聯副秘書長となる。

経歴と上記引用文を見れば、阿英の政治的立場は愛国民族主義であることがわかる。阿英はそれを明確に表明している。阿英の主義主張がどのようなものであれ、資料を扱う姿勢が公正厳格であれば問題はない。だが、そうっていない箇所がある。阿英の愛国民族主義が関係すると思われる（後述）。

引用文をみれば、上述のとおり戦争中も目録作成の作業が続けられていたことが理解できる。その大量の蔵書は延安まで運搬できなかったというからどこかに保管していたのだろうか。しかし、日本軍と蔣介石匪賊がそれらを強奪したとある。後の「文化大革命」でも没収されたというから阿英の故郷蕪湖に設立された「阿英蔵書陳列室」にはどれくらいの書籍が寄贈されたのか。詳細は不明だ。

阿英とは直接の関係はないが、この「叙記」のない初版を私は所有している。

前に示したように『晚清戲曲小説目』には初版と増補版が刊行された。両方に「叙記」がついている。当時のことだネットは存在しない。孔夫子旧書網など影もない時代だ。中国の古書を手に入れる機会は、香港経由か日本の古書店くらいしかなかった。書いていて思い出した。故増田渉は珍しい清末小説を多数所蔵されていた。生前私に向かって「全部日本の書店で買ったものだよ」と言われた。その後、私も同様の経験をいくつかした。現在とは状況がまったく異なるのだ。

香港経由で購入した初版には「叙記」がない。時間差で入手した2冊ともだ。初版にないのだから「叙記」はあとの増補版に追加されたものかと考えた。しかし、その初版をよく見ると「叙記」部分を切り取って前後頁を張り付けた痕がある。日本の古書店から別の初版を購入してその「叙記」があることを確認した。「叙記」には香港にとっての禁句でも書かれているのかと思えば、なるほど香港影印本『晚清小説史』の「蔣匪」が削除されたのと同じ理由らしい。

上記の引用文に下線を引いた部分については次のとおり。『阿英文集』（香港三聯1979/北京三聯1981）ではそのソ連部分を削除する。その背景には当時の中ソ対立が影を落としているのだろう。編者は前出呉泰昌だ。原文を尊重する気はないらしい。どうやら中国学界にはそのような傾向があると薄々気づく（後述）。

「鄰女語」の本文改竄

阿英の自爆について説明する。作品の本文を改竄した。彼の愛国民族主義が根底にあつて政治的判断が働いた例だ。

憂患余生（連夢青）「鄰女語」は『繡像小説』第6-20期に連載された。全12回、未完。該作品は、阿英編『庚子事変文学集』（北京・中華書局1959）に収録されている。

阿英の問題は、作品本文に無断で手を加えたことだ。加筆6カ所、省略32カ所、語句の転倒

4カ所、書き換え31カ所、誤植訂正22カ所の合計95カ所もある。削除された第2回の294字、第9回の61字と22字は量的にも大きい。

本文削除は義和団事件の混乱した社会を描写する場面に出現する。義和団が人民を虐殺する箇所を削除した。そうした理由は義和団を正しいと評価する中国学界の認識に適合しないからだ。当時の政治的判断によって恣意的に作品本文を改竄したといわざるを得ない。ひとつでもそういう例があると本文への信頼が揺らぐ。阿英の編集する資料は利用するのに危険があるのではないか。そういう疑いが生じるからだ。初出を見ることができないばあい、これはとても困る。

理由を明らかにせずに作品本文を加工した例はほかにもある。

『文明小史』の本文改竄

李伯元『文明小史』（北京・通俗文藝出版社1955）の第59回だ。ここには劉鉄雲「老殘遊記」第11回原稿から盗用、すなわち無断借用した箇所がある。阿英はそれを知っていたが「盗用」という言葉は使わない。「叙引」において解説して、李伯元も劉鉄雲と同じく「北の義和団、南の革命党〔北拳南革〕」に反対していたと述べる。そこに注釈をつけて「この1500字は本書ではすでに削除した〔此千五百言、本書已經刪去〕」（4頁）とだけ書く。この大規模な削除を行った理由はなにか。阿英は説明しない。

理由を推測すれば次のようになる。劉鉄雲は「北拳南革」を批判して罵った。「文明小史」はそこをそのまま無断借用している。義和団と革命党を支持するのが阿英の立場だ。「北の義和団、南の革命党」を痛罵することは、阿英の愛国民族主義では認めることはできない。ゆえに阿英は自分の考えに適合しない本文部分を削除した。

阿英自身の愛国民族主義にもとづく彼なりの

作品評価は当然あってもいい。だが、自己の主義主張を作品編集に直結させ本文に手を加えるのは研究行為として間違っている。阿英にとっては関係部分を削除することが必要だし自然だったかもしれない。そこには「北の義和団、南の革命党」を正の方向で評価するという結論がすでに定めてあるからだ。愛国民族主義を優先させて持説に不都合な本文部分は切り捨てることを躊躇しない。現実の存在を無視する。私はこれを研究者として自爆しているという。

上記の阿英「(文明小史)叙引」は阿英『小説四談』（上海古籍出版社1981 呉泰昌、銭小雲編輯）に収録してある。ところが、原文にあった注釈「此千五百言、本書已經刪去」を削除する（154頁）。こゝも呉泰昌の判断であろう。原文通りではないから呉泰昌の操作は正しくない。

「救劫伝」の著者——義和団事件に関連して

義和団に対する阿英の理解は、小説本文を改変する部分に見ることができる。

義和団を題材にした良廬居士「救劫伝」は阿英編『庚子事変文学集』（中華書局1959）に収録されている。奇妙なのは16回本を阿英は入手しているのに12回分しか掲載していないことだ。さらに本文の一部分を削除し別のものと差し替えている。該作品には阿英による偽造部分がある。このことについて言及されることはほぼない。

問題のもうひとつは「救劫伝」の著者について阿英が誤った説明をしたことだ。そのため後の混乱を引き起こしている。

良廬居士「救劫伝」は最初『杭州白話報』（1901-1902）に連載された。そのあとで杭州白話報館が木刻単行本（刊年不記）を刊行した。この作者が問題である。

阿英が問題を明確にしたのが「国難小説叢話」（『劍腥集』1939。今、『小説三談』上海古籍出版社1979。8頁）であった。作者良廬居士

について阿英は新しい意見を提出した。すなわち「作者は良廬居士というが『驢背集』を著した人と同一人物であるかどうかは知らない〔作者叙良廬居士，不知与著《驢背集》者是否一人〕」である。

「驢背集」の作者は胡思敬だ。前出『庚子事变文学集』に「驢背集」も収録して説明したのが混乱の始まりになる。

胡思敬(良廬居士)的驢背集四卷，……与救劫伝作者良廬，不知是否一人？9頁

要約すれば「驢背集」の作者胡思敬を説明して「良廬居士」と表示し、さらに「救劫伝」の作者良廬と同一人物であるかは知らないと同じことをくり返している。阿英の説明によれば「驢背集」の作者は胡思敬であり良廬居士という号を有する。一方の「救劫伝」の作者も同じ良廬居士だと指摘している。これを読んだ人は、疑問符がついているが同一人物だと阿英は断定したと受け取る。同じ良廬なのだからそうならざるをえない。

疑問符付きながら阿英の断言がある。それ以後、「救劫伝」の良廬居士は「驢背集」の胡思敬ということになってしまった。

しかし、いくら調べても胡思敬の号に良廬居士は見当たらない。退廬、退廬居士ならばある。

以上を見れば答えが自然に出てくる。阿英が「胡思敬(良廬居士)」と書いたのは「胡思敬(退廬居士)」の誤植だとわかる。良廬と退廬は見間違う。「救劫伝」の良廬居士は張仲清、本名は張茂炯だ。

阿英の原稿では「胡思敬(退廬居士)」と書いていただろう。ただし、植字の段階で誤植し校正の際に間違いを見逃した可能性がある。校正をしたのが阿英でなければ誤記の責任は免れるだろうか。

「空谷佳人」の勘違い

誰にでも勘違いはある。ただし阿英のような学界の権威がそれを公表すると影響が大きい。

阿英目録127頁から引用する。

空谷佳人 英 博蘭克巴勒著。林紓訳。光緒三十三年(一九〇七)商務印書館刊。又東方雜誌本。

林紓訳だと明示している。単行本になる前は『東方雜誌』に掲載されたと注がある。ならば『東方雜誌』にも同じく林紓訳と表記しているだろう。私は長く阿英目録の記述を信じて疑わなかった。なにしろ『清末民初小説目録』(初版1988。以下、樽目録)を編集しはじめた時の基本資料のひとつがこの阿英目録だったのだ。

樽目録を作成するときに参照した『中国近代期刊篇目彙録』(上海人民出版社1965/1980-1984。③1225頁)、『“東方雜誌”総目』(北京・生活・読書・新知三聯書店1957/上海書店影印1980。67頁)には著者と訳者は空白になっている。また劉永文『晚清小説目録』(上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008。35頁)はわざわざ「未題撰者」と注記している。後から考えればそれが正しい記述だった。しかし、阿英説を信じていた私は樽本目録第5版(2013)までは博蘭克巴勒と林紓を掲げたのだ。

『東方雜誌』に存在しない博蘭克巴勒と林紓を提示した研究者名とその発表年を簡単に列挙する。

陳鳴樹『二十世紀中国文学大典』(1897-1929)上海教育出版社1994。112頁。102頁は創作、佚名とする。

陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社2002。160頁

楊 凱『中国近代報刊中的翻譯小説研究(1872-1911)』華東師範大学2006博士学位論文。113頁

杜慧敏『晚清主要小説期刊訳作研究(1901-1911)』上海世紀出版集団、上海書店出版社 2007。446頁

張旭、車樹昇『林紓年譜長編(1852-1924)』福州・海峡出版發行集団、福建教育出版社 2014。124頁

文献を列挙したのは阿英説が多く、研究者から強く支持されていた事実を示すためにほかならない。

馬泰来が「空谷佳人」を含む4作品について次のように説明していることにあとから気づいた。馬泰来「林紓翻訳作品全目」(『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981)の「已検原書、翻訳者実皆為商務印書館編訳所」である(98頁)。つまり単行本には林紓の名前は掲載されていないという意味だ。馬泰来は『東方雑誌』については言及しない。

なるほど初出の『東方雑誌』3年第8-13期(1906-1907)を見れば、原作者、訳者ともに書かれていない。作者不明の翻訳作品がなぜ阿英の説明では林紓になるのか。勘違いなのだろう。阿英はせめて『東方雑誌』の表記が単行本とは違うことくらい記述してもよかった。

雑誌掲載時は原著者、訳者ともに記載がない。それが単行本化されたときなぜだか「(英)博蘭克巴勒著、商務印書館編訳所訳」になった。商務印書館編訳所を訳者とするのは、訳者不明か買い取り原稿である可能性が高いことになっている。

雑誌初出では存在しない原作者名博蘭克巴勒が、単行本になって突然、出現する。これは私の理解をこえている。商務印書館編訳所に記録があってそう補足したのだろうか。その理由を説明した研究者はいなかった。不明のままだ。

商務印書館の「説部叢書」には原作者不記の作品はかなりある。ゆえに「空谷佳人」についても原作者なしの商務印書館編訳所訳だけでよかった。ところが博蘭克巴勒という英国人だ。

あまりに不思議だからくり返した。

私は調べた。しかし、博蘭克巴勒に該当する英国人の名前を見つかることができなかった。

私はしばらく考えて原作者名は虚構であると判断した。つまり商務印書館編訳所の担当者が原作者を捏造したのだ。

単行本にする時、編訳所の編集者は理由不明ながら外国人風の名前を独自につけることにした。そこで書名の「空谷佳人」の一部「空谷」を利用する。「空谷」を英語に直せば BLANK VALLEY となる。そのままを音訳して「博蘭克巴勒」にしたというわけ。

遅くなったが第6版(2014)から「博蘭克巴勒は空谷BLANK VALLEYを音訳したもの。林紓訳ではない」と説明した。

その後、古二徳(César Guardé-Paz)「《深谷美人》罕見林譯與《空谷佳人》譯者考辨」(『清末小説から』第117号 2015)が BLANK VALLEY とするものをほかに見ないこと、甘永龍訳であることを指摘している。

「翻訳は創作よりも多い」か

阿英は説明することなく、あるいは証拠を提出せずに断言することがある。

清末小説全体の傾向について述べる次の主張は有名だ。「翻訳は創作よりも多い」「全体の3分の2になる」。『晚清小説史』「第十四章 翻訳小説」の冒頭に見える。

清末小説は結局のところ創作が多数を占めるのか、それとも翻訳が多数を占めるのか、ともし問う人がいれば、当時の状況の大よそを知っている人であれば「翻訳は創作よりも多い」と回答するはずだ。いくつかの統計によれば翻訳書の数量は全数量の3分の2になる……

如果有人問，晚清的小説，究竟是創作佔多數，還是翻譯佔多數，大概祇要約略的了解當時狀況的人，總會回答：「翻譯多於創

作。」就各方面的統計，翻譯書的数量，總有全数量的三分之二，…… 初版274頁／修正版180頁

「いくつかの統計によれば」と一応は説明している。だが、その統計とは具体的には何を指すのか。複数の書目をあげているからそのことのようにも読める。だが阿英はそれらについて収録数が少ないといっているだけだ。

これも推測になる。阿英目録そのものを根拠とするのだろう。自分で収集した清末小説を創作と翻訳のふたつに分類して目録を作成した。阿英目録にもとづいて数えれば、たしかに翻訳はほぼ「全体の3分の2になる」。阿英は「自分が作成した目録によれば」と付け加えるべきだった。しかし「いくつかの統計によれば」と書いていかにも客観的にそういう状況だと記述したので。

阿英のこの断言は、長年にわたって信じられてきた。それはそうだ。阿英は研究の権威である。阿英ほど多数（1千種以上）の実物を所有していた人はいない。その阿英が自分の所蔵する書籍にもとづいて「翻訳は創作よりも多い」「全体の3分の2になる」と断言している。信用しないわけにはいかない。ネットで少し調べれば陳俊宏『西遊記主題接受史研究』（万卷楼2012）がいまだに阿英の断言を引用していることがわかる。翻訳研究の専門書である宋韻声『中英翻譯文化交流史』（瀋陽・遼寧大学出版社有限責任公司2017）も阿英から引く。すなわち「1875年から1911年までの40年に満たない期間に中国の翻訳小説は600部あまりに到達し当時出版された小説総数の3分の2を占めた」（20頁）。疑う様子は見えない。阿英の影響力は強く長く広範囲にわたっている。

ことほどさように阿英の力強い主張に対して異議をとなえる研究者はいなかった。1千種をこえる阿英目録を前にしては発言する勇気がでないのも当たり前だ。

阿英目録を使用していて気づいたことがいくつかある。

清末に登場する新しい形態の雑誌から作品を採取しているのが画期的である。これも阿英の優れた判断力と認識力を示しているというべきだ。なぜならそれまでの書目は単行本主義を採用していたからだ。雑誌が出現する以前には採録するとすれば単行本しかない。

阿英目録に先行する周越然『版本与書籍』（上海・知行出版社1945）がある。これに収録された「稀見小説五十種」「稀見訳本小説」という珍しいふたつの書目は、従来どおり単行本を中心にしている。雑誌からは採取していない。

雑誌掲載の小説に注目した阿英の賢明な判断に感心したのが事実だ。しかし後から疑問を感じた。阿英目録に収録された雑誌掲載作品が不完全であることだ。ある作品は収録するが同じ雑誌の別の作品は未収録になっている。また、新聞に掲載された作品もほとんど見えない。当時の新聞については採録対象にするのはかなり困難だ。十分に保存されているとは限らない。あったとしても紙質そのものが悪く経年劣化しているばあいが多い。図書館であれば閲覧不可になる。

新聞については理解できる。しかし、雑誌掲載作品の採取に不徹底があるうとは思ってもしなかった。なぜそれに気づいたかといえば、私は清末の小説専門雑誌総目録をいくつか作成していたからだ。それまでは清末は雑誌の時代だといいつつながら、総目録すら編集されてはいなかった。一連の作業が1988年の『清末民初小説目録』（のちに樽目録第3版2002、第9版2017）につながった。雑誌掲載の小説もできるかぎり収録してみると阿英の結論とは違うものが出てきた。そこで論文「阿英説「翻訳は創作よりも多い」は事実か」（1998）を書いた。全体から見ると創作小説のほうが翻訳小説をうわまわって発表されているのだ。阿英の説明とは違う結

論を提出した。

私が数字をあげて説明したことに対して賛同しない研究者もいる。清末小説の目録を独自に編集した前出劉永文編『晚清小説目録』である。

劉永文の目録は雑誌、新聞と単行本に分けている。注目すべきは雑誌新聞部分だ。充実している。特に新聞部分はそれまでに見ないから役に立つ。ただし単行本は先行目録を写したものでらしい。

劉永文は数量問題に興味を持っていた。自分で小説目録を作成したのだから創作と翻訳の数を実際に数えただろう。だが不本意ながら(たぶん)樽本説を否定する結果を得ることができなかったようだ。それでも創作が翻訳よりも数のうえで上回るという事実を受け入れなかった。樽目録第3版には新聞掲載の小説が少ないことを指摘して次のように書いている。「(新聞小説の統計がないから) 翻訳小説の問題については、さらに一步進めた調査研究が必要である。我々が清末民初の小説を研究する時には各種結論を急いで出すことはできないのだ」(前言3頁)

ここには阿英に対する劉永文の強い信頼感が表明されている。阿英説が将来に再確認されることを願望しているのが明らかだ。しかし、現実が劉永文の期待を裏切る。

阿英説に興味をもつ研究者のひとりに王鑫『晚清標『新』小説論稿』(北京・中国社会科学出版社2017)がいる。「近代小説数量統計表」(369頁)があってそのなかのひとつは各年の創作と翻訳について数を掲げる。謝仁敏(2013[4]、369頁)からの引用だ。数字は少し古いが1900-11年を集計すれば、創作1,650件、翻訳1,002件となる。明らかに創作の方が多いことがわかる。

樽目録はその後も新聞小説を取り込み収録作品を増加させながら2017年には第9版をウェブ公開した。清末も民初も総合すれば創作が翻訳よりも多いという結論は動かない。 四

清末小説から

- 康 東元○『日本近現代文学漢訳全典』北京・外語教学与研究出版社2017.8 中青年学者外国语言文学学术前沿研究叢書
- (日) 武田雅哉、林久之著、李重民訳○『中国科学幻想文学史』上下巻杭州・浙江大学出版社2017.9
- 張 珂○『民国時期我国的英美文学研究(1912-1949)』北京・中央編訳出版社2017.10
- 趙 海霞○『近代報刊劇評研究(1872-1919)』濟南・齊魯書社2017.10
- 王 鑫○『晚清標『新』小説論稿』北京・中国社会科学出版社2017.11
- 陳 大康○(『晚清標『新』小説論稿』)序 王鑫『晚清標『新』小説論稿』北京・中国社会科学出版社2017.11
- 劉 蘭肖(葉建と共同執筆)○『中国期刊史 第一卷(1815-1911)』石峰主編 北京・人民出版社2017.12
- 吳 永貴○『民国図書出版史編年:1912~1949』上中下冊 北京・社会科学文献出版社 2018.1
- 羅 智国○『近代中国書業的非凡時代(1905-1937)』合肥・時代出版传媒股份有限公司、黄山書社2018.2
- 荆 偉○【書評】跳出線性想像, 回帰多元叙述——評王風《世運推移与文章興替》『中国現代文学研究叢刊』2018年第2期(総第223期) 2018.2.15
- 松村茂樹○長尾雨山与吳昌碩交誼の原点——漢長生未央博博及其題詩『第五屆“孤山証印”西泠印社國際印学峰会論文集』中冊 2017
- ○吳昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐる『大妻女子大学紀要(文系)』第50号2018.3
- ○長尾雨山の旧宅址を訪ねて→京都室町通と西洞院通での実地踏査報告 大妻女子大学『コミュニケーション文化論集』第16号 2018.3.22

次号の公開は2018年10月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>